昭和44年12月23日第3種郵便物認可昭和47年1月1日発行毎月1回1日発行

日本バドミントン協会

バドミントン界

no.29
1
1972

THE BADMINTON WORLD



No.6000 FIVE ACE DELUXE



テクニックが冴える

ガット有効面のひろがり

〈バドミントンを科学する〉ヨネヤマのラケットは、ガットの有効面積が、広く設計されている。だから、どこで打っても、シャトルを鋭くとらえる。テクニックが、冴える。狙いに、くるいがない。シャトルとラケットの、一瞬の出逢い。この一瞬を、科学した結論です。ヨネヤマは、カンと経験だけを、頼りにはしません。あくまでも科学的に、探ぐり、割りだして、ラケットを造っているのです。

No.6000ファイブエースデラックス/¥3,500(フレームのみ)

ヨネヤマラケット

御礼

本誌は、さきに七一年新年号の本欄で、本土復帰間近い沖縄の仲間に、用具類の支援の手を差しのべよう、との提唱を行いました。

バドミントン関係者の皆さまが、すでにご承知の通り、沖縄は、本土と距離のありすぎることなどから、用具類がはなはだしく不足し、従って、競技の普及も遅れております。

一方、本土復帰を記念するスポーツ大会が来年初夏には盛大に開かれる予定であり、これにバドミントンも加わっております。

こうした事情等から、このさい、少しでも沖縄の人々の間にバドミントンの楽しさをひろめ、また記念スポーツ大会のおりには、本土と同じレベルでプレーを交歓するために、少しでもプラスすれば、との考えから、広く愛読者、関係者各位の善意を期待したわけであります。

十一万七百八十五円と用具20点

沖縄援助の寄託まとまる

微力な本誌の呼びかけではありましたが、さいわい、多くの方々のご賛同を得た結果、計十一万七百八十五円、用具類20点が、本誌の手元に寄せられました。

本誌では、近く、この善意の寄託金銭を用具にかえ、とりまとめの上日本バドミントン協会を通じて、沖縄協会あてに送付する予定です。

この一年、ご協力下さいました各位に、心からお礼申し上げるとともに、今後とも、本誌ならびに、バドミントン競技界発展のため、暖いご支援をお願い申し上げるしだいであります。

一九七二年一月

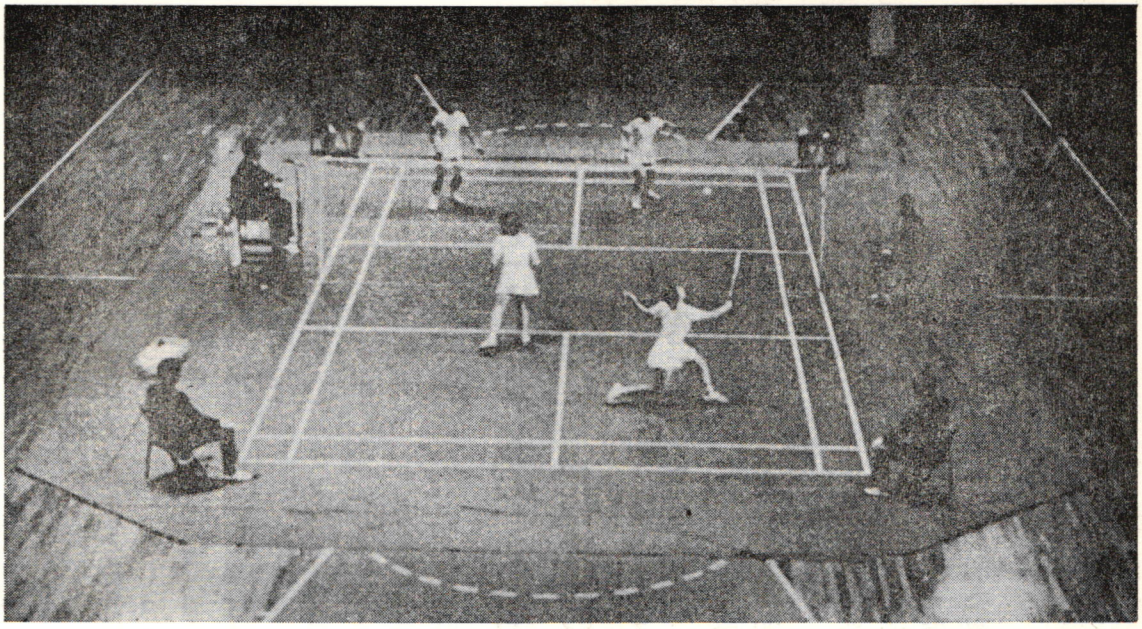
「バドミントン界」

目次（72年1月号）

〔特集〕全日本総合選手権大会……2
・高木が女王にカムバック
・男子は栂野尾に初栄冠
・〃三強〃時代にはいった男子
・全日本から――成功だった選手パーティ
・戦評　・ヘアピン
・グラフ　名場面の連続写真
◇中山・湯木組に日本スポーツ賞……8
〔特集〕近づくユ杯第二次防衛戦……9
・監督、コーチはかく決意する
・選手団合宿座談会
――なにがなんでも栄光の座、三たび勝ちとろう
・代表選手を診断すれば
――体力・運動能力の測定結果は――
・ユ杯戦と日本栄光のあと
――高木紀子、天野博江両選手の回顧と反省
（東海女短大紀要から）――
◇レコード……37
◇表紙の言葉……36
・全日本総合選手権
◇編集室から……36
・全日本学生選手権ほか
◇お知らせ他……36

本号の協力スタッフ

表紙／撮影・山田真市／同制作・小浜正道／グラフ撮影・山田真市／ほか写真提供・山本洋彦



栂野尾初優勝"時代"の幕あける

女子は新婚・中山が4年ぶり王座に

46年度全日本総合選手権大会

46年度の全日本総合選手権大会は、十二月七日から十二日まで、東京の中央区体育館（前半）と国立代々木第二体育館の両会場で開かれた。

各種目とも波乱あいつぎ、まず男子シングルスでは、過去、5連勝のベテラン小島一平（ヨネヤマ）が、決勝で同じ社の後輩・栂野尾昌一にフルゲームで敗れた。栂野尾は初優勝。

小島転倒、心身に疲れ

六年目に〝城〟明け渡す

同ダブルスは強豪とみられたペアが次々に姿を消し、準決勝で小島・栂野尾組を退けた鈴木健二、池田信孝（電電東京）の〝長短コンビ〟が初のタイトルに輝いた。

女子は一カ月余前に結婚して中山と姓の変わった、もと高木紀子が大ハッスル、シングルスで四年ぶり五度目、ダブルスでは過去三連勝の相沢・竹中組をくだし、通算六度目と〝二冠〟を手にした。混合は堺・天野組が首尾よく連勝した。

◆男子シングルス

▼準決勝

小島（ヨネヤマラケット）
2（15—9、15—7、15—13）1
本間（トヨタ自工）

栂野尾（ヨネヤマラケット）
2（15—8、15—9）0
鈴木（電電東京）

▼決勝

栂野尾
2（15—15、15—8、15—9）1
小島

男子シングルスで史上初の六連勝をねらった小島は、準決勝で本間と1時間以上の長い試合をやったため、疲れが完全にとれなかったようだ。それに、前日のダブルスで敗退したショックもあったろう。プレーがラフで、サーブの平凡なミスが目立ち、クリヤーもいつもよりずっと浅かった。長身の栂野尾に強打を許す結果となったのは、やむをえなかったといえる。

このため第一ゲームは、いきなり11—2と栂野尾がリード、小島は精いっぱいがんばって18—15と逆転したものの、第二ゲームの途中で、栂野尾の強烈なスマッシュをとりそこねて転倒したさい、左足を痛め、動きが極端に悪くなった。

こうなると、小島は完全に防戦一方。最後には、気力もなくなり、判断のミスも加わってチームの後輩・栂野尾に名をなさしめた。小島の一人舞台だった時代が終り、栂野尾、本間を加えた〝三強〟の時代がおとずれたといえるだろう。

（小林範夫）

鈴木、複はタイトル手に

電電の応援、大はしゃぎ

◆男子ダブルス

▼準決勝

今泉・河村（高岡市役所）2（15―5、15―4）0 門間・木戸（日体大）

鈴木・池田2（電電東京）2（15―17、15―11）0 草島・田所（法大）

▼決勝

鈴木・池田2（15―12、15―10）1 今泉・河村

いままで精神的に弱いといわれていた電々の鈴木がよく打った。第一ゲームは鈴木・池田組が、まとめて点をとる試合運びで難なく先行。しかし若干、今泉・河村組が調子が出ていないように見受けられた通り、第二ゲームは逆に今泉組が前半7―5のせり合いから一気に13―5と大量リードした。

ここで鈴木組は気をとり直して反撃に転じ、鈴木が徹底的に打ちまくり、一寸ドロップを落とそうものなら、池田が目をむいて先輩の鈴木を怒るという気合の入れよう。12―13まで迫った。だが大量リードされてはどうにもできず、遂にファイナルにもつれ込んだ。

どちらが勝っても初優勝ということで、両ペアとも最後のゲームに全力を投入。チェンジエンドまでは一進一退であったが、徐々に鈴木組の球が下向きに放たれる割合が多くなり、逆に今泉組はどうしても上に逃げるようになってしまい、15―10で電電ペアに栄冠が輝いた。

電電ベンチの喜びようは大変なもの。思うに今大会のように全くの個人戦の中で、電電チームは、常に仲間の試合を応援し、良いチームワークを見せていただけに、鈴木・池田組の優勝というよりは、むしろ電電東京の優勝という感がした。敗れた今泉・河村組も実業団大会チャンピオンの面目をかけ健闘したが、鈴木・池田組の絶好調で惜しいゲームを失った。

（山本洋彦）

東大阪勢がんばる

◆女子シングルス

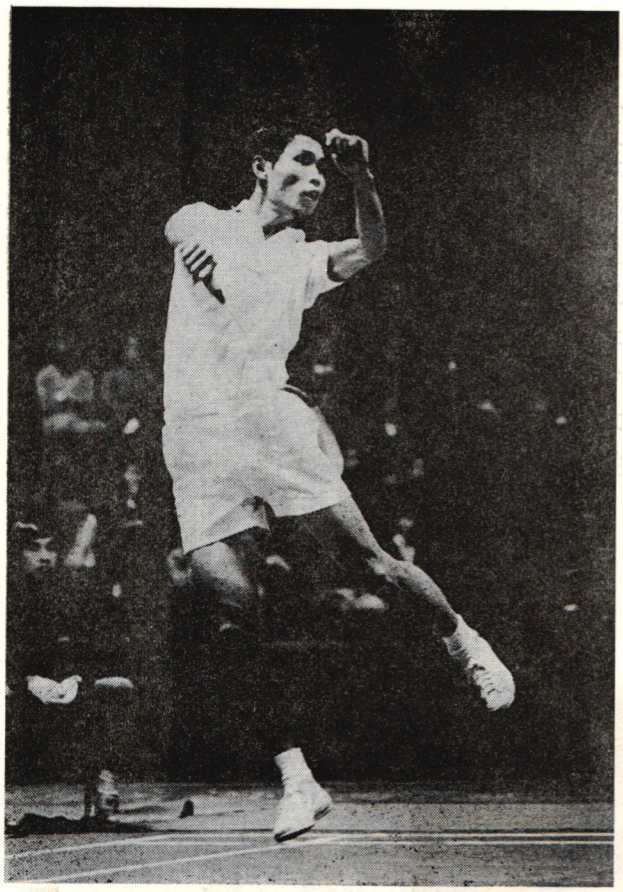
▼準決勝

湯木（河崎ラケット）2（11―8、11―6）0 高崎（東大阪短大）

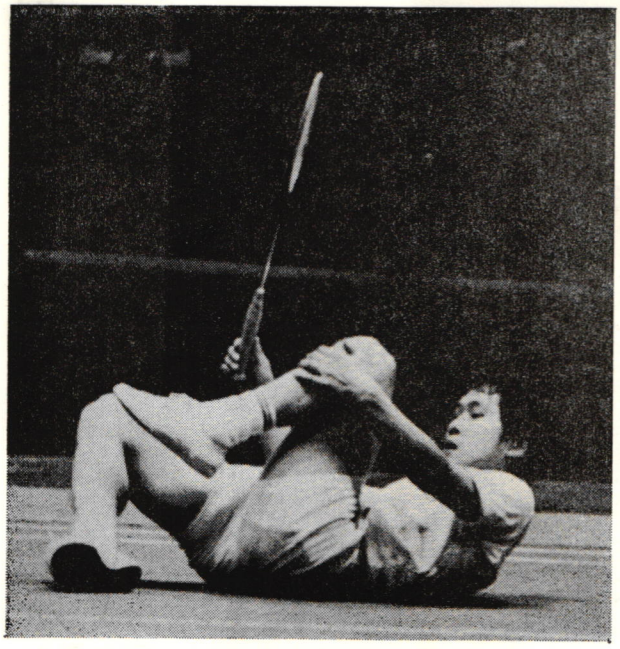
中山（弘文堂）2（11―7、11―5）0 柴山（東大阪短大）

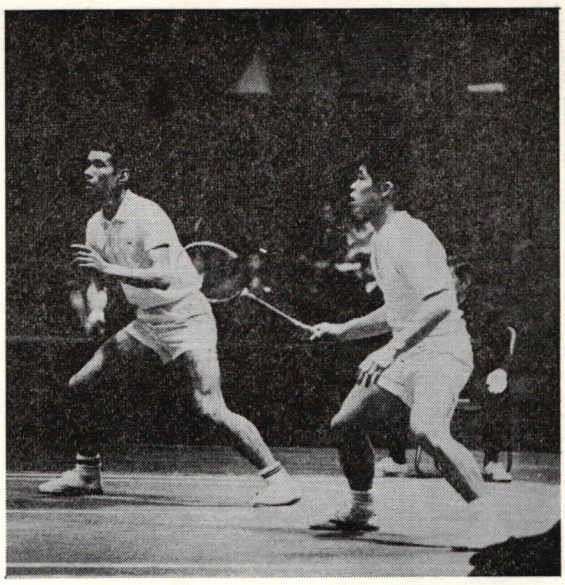
▼決勝

中山2（11―11、11―5、5）0 湯木



栂野尾にやっと〝春〟が来た。長身を生かした強打にさすがの大先輩小島もがっくり，疲れて転倒。王座をゆずった。





▲電電東京のコンビ，ついに優勝飾る

中山組、一方的に押す

相沢・竹中〝復活〟ならず

◆女子ダブルス

▼準決勝

相沢、竹中（ヨネヤマラケット）
2（15―4、15―9）0
池田、塩崎（日女体大）

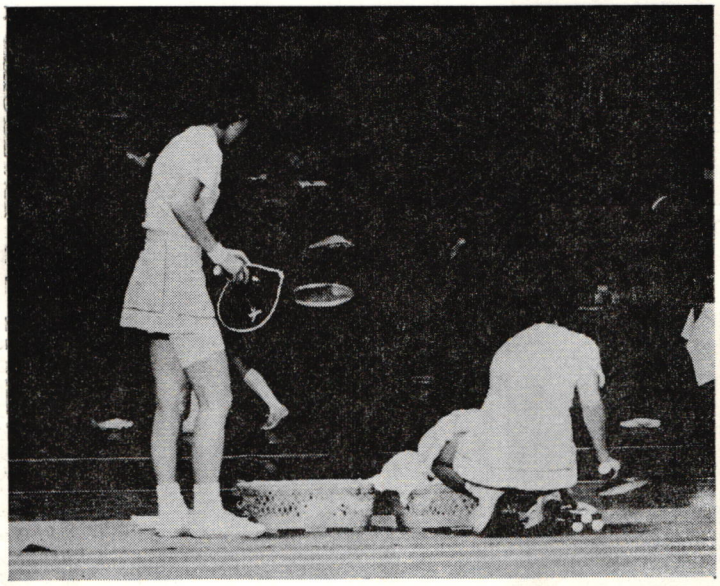
中山（弘文堂）、湯木（河崎ラケット）
2（15―11、11―15、15―8、9―1）
柴山、高崎（東大、阪短大）

▼決勝

中山、湯木
2（15―9、15―12）0
相沢、竹中

女子ダブルス決勝

あと六カ月後にユーバー杯の防衛戦を控えて、同杯の代表選手ペア同士の対戦とあれば、だれでも好試合を期待する。ところが内容はその期待に反して、山も谷もない平担なものだった



▲9か月ぶりの名コンビ，相沢・竹中組復調ならず

〝女王〟全盛思わす巧技

湯木、やはり堅陣抜けず

試合前の練習で中山の意気がすでにうかがえたが、一方、試合開始と同時に出された絶好のサービスに、湯木のこの一戦にかける気合もまた、ひしと感じられた。

しかし湯木はスタートで動きが固かった。5―4から7点連続、中山に奪取されるコントロールの悪さ。ユ杯代表のトップを争う試合としては、かなり迫力に欠けていた。

第二ゲームはスマッシュの応酬からクリヤーへと、一転ラリーは息ずまる火花が散った。手の内を知りつくした相手だけに、簡単には決まらない。

しかし、中山4―3から冴えたカットが湯木を制し、以後はじりじりと中山ペース。5ポイント連取して9―3と開き、ここで2点を許したものの、すでに勝負あった状況。心身ともに全盛時代に返ったかのような中山の安定ぶりに、湯木はまたしても、なすすべがなかった。

（並木万次郎）

ヘアピン

カラーで選手権

バドミントン史上初のカラーによるテレビ中継が、全日本選手権で、NHKによって行なわれた。

バドミントンの試合は、暗いのがこれまでの特色（規則によると、ネット中央上で三百ルクス以上）。前回のユーバー杯では「これでは暗すぎてうつりが悪い」とテレビ、報道カメラマンから、苦情が山のように寄せられたことがある。

カラーとなれば、白黒テレビの数倍の光源が必要なので、あらかじめ、岡村競技副委員長、山本審判委員、堺、中山、湯木選手らがNHKと話し合って万全を期した。

結果は、視聴者と選手には好評を拍したが、ついうっかりしたのが観客への対策。

選手には直接、照明をあてられないので、9個のライトがカメラ側から、反対側のスタンドへ強烈に行ってしまう。これはまぶしい、と、そのスタンドの観客は、そろそろ、あいている逆の席へ移動。

おかげで、ブラウン管を通し

相沢・竹中組が二人とも負傷後で不調、凡ミスが多かったからだ。第一ゲームは相沢組がサービスをキープして1―0と好スタート。ところがサービスを失うと、あっという間に中山・湯木組が9本を連取して逆転した。

こうなるとペースは一方的に中山組のものだ。相沢のリターンがオンラインに決まり、湯木にリターンミスがあって2本を失ったあと、中山のスマッシュ、ライン上に落す巧技などで12―3とし、その後も着実にポイントをあげた。

第二ゲームは中山組が7―8から、勝ちを意識してコンビ・ミス、竹中のスマッシュなどを決められて12―12とピンチを招いた。

だが中山の冷静なリード、スマッシュで乗り切った。試合の最後は相沢のサービス・リターンがネット。追力に乏しい試合を象徴しているフィナーレだった。

（竹市行男）

観戦記

柴山組、モデル・チェンジ
ト杯へ、ものたりぬ男子複

トマス杯、ユーバー杯の〝将来〟を考えながら全日本総合選手権を見た。女子はホープが育ちつつあり、男子の方は、ベテランの後退もあって〝いまひと息〟という感じだった。

女子でまず目についたのは、ダブルス準決勝で、ユーバー杯（六月初旬）代表チームのNO1ペアである中山（旧姓高木）湯木に食い下がった柴山・高崎組。このペアは、これまで、高校生のプレーから完全に抜け切れないといった印象が強く、守り一方の試合ぶりだったが、今大会から攻撃型にモデルチェンジした。

まだフォーメーションのとり方、ネットぎわの小ワザでは、中山・湯木組におよぶところではなかったが、ムチのような体から打つ柴山のスマッシュ、高崎の落ちついた正確なプレーが、よくコントロールされて、むしろ押し気味に試合をはこんでいた。

中山・湯木、相沢・竹中組についで、国際試合用の信頼できるペアが育ちつつあるといっていいだろう。近々の対デンマーク戦（大阪、東京、横浜）で自信をつければ、六月のユ杯の即戦力となるかもしれない。

男子シングルスは、小島の一人舞台の時代が終って、栂野尾、本間を加えた三強の時代が来るだろう。小島は準決勝、決勝で本間、栂野尾を続けて相手にしたため、疲労でタイトルを失ったが、攻めのバドミントンは、外人に通用するという点では、やはり日本一だろう。

ト杯で勝ち進んでいくためには、本間、栂野尾にも、積極的に攻撃を組み立ててゆくファイトが欲しい。

男子ダブルスは、ト杯を考えた場合、現状では安心していられない。この大会で見た限り、国際的な戦力になりそうなペアは見当らなかった。

一昨年のアジア大会で、決勝まで進出した本間・栂野尾組が、現状では最強のペアになるのではないだろうか。小島をシングルス専門に、この二人を単複兼用に使っても、それだけでは、ト杯チームを編成しにくいだろう。

（読売新聞・小林範夫）

堺・天野組が連勝
杉田夫妻また力つきる

◆混合ダブルス

▼準決勝

堺（河崎ラケット）
天野（東海女短大教）
2
15―8
8―15
15―9
1
15―6

杉田（立野高教）
杉田（コロムビア）
2
17―15
15―14
9―0

星野
土井
（電電東京）

鈴木
奈良岡
（電電東京）

▼決勝

堺
天野
2
15―15
14―17
15―3
1

杉
田

杉
田



て見た人には、お客の入りが全然マバラに思えたかもしれない。今後は対策要注意。

× × ×

これもまた史上初、というのが、全日本終了後に開かれた選手団のパーティ。全英選手権など、海外の主な試合では、大会最終日直後に、はなやかで楽しい会合があることに目をつけた中山（旧姓高木）選手らが中心となって企画したもの。

学生は千円、社会人千五百円の会費を集め、運営もまったく自前。開会式のとき、出場選手たちから申し込みを受けつけ、結局、協会役員や報道関係の飛び入りもまじえ、七十数名が集まる盛況。

会場は東京赤坂の某所。もちろん、飲みもの、食べものはすべて持ち込み。料理は新婚の中山夫人らが前日からがんばってつくったが、なかなかイケる。これでは、ご主人もかわいそうなどと、味の方には賛否両論。

会場のエレクトーンや、持参のテープで、終始、若人むきのリズムとメロデーが流れ、ゴーゴーから社交ダンスまで、ステップもにぎやか。ひときわ目立った名手は日本協会事務局の本島嬢、高坂選手だったそうだ。男もがんばらなくっちゃ。

共同通信

竹市　行男

全日本やぶにらみ

ヒットは選手パーティ
時間割やシャトルにまだ疑問

全日本総合選手権大会は平穏無事に終った。といっても、それは表面的に見た場合。五日間の大会を観戦して気付いたことのなかから、いくつかの〝苦情〟と〝注文〟を提出したい。これはあくまでも取材記者の参考意見であり、もし可能ならば次回にでも実現してほしいのだが…。

苦情の一。女子は来年六月にユーバー杯の防衛戦が控えていヤ〟と私事で多忙な一年を過ごしていた。練習では東京在住の若手を相手に「これまでより時間、内容とも充実していたように思う」といっていたが、前回大会ではすでに全盛時の鋭さが見られず「高木もこれまでか」と一部に噂されたほどだった。

ところがそんな無責任な噂を見事に打ち破るほどのプレーをした。それも多忙な毎日と年令的なギャップを克服してだ。その反面、若手ホープのふがいなさが目立つのである。決勝で対戦した湯木は、本来のスピーディな攻撃が出来ず、スマッシュ、ネットプレーで完敗。常に先手を取られていた。また「相手の得意は不得意」のたとえ通り、湯木が自分の〝手〟を逆に使われてやられた。また準決勝の柴山もわずかに苦しめて終り。

このほか相沢、小片、高坂らの準一級がもう少しがんばって大会を盛り上げてもらいたかった。つまらない精神論などぶちたくないが、中山のプレーしている姿からみて、ラケットを振る。ファン、関係者なら先刻ご承知の通り。そこで観戦者はあくまでも女子のトッププレーヤーの動きを追いかけたのは当然のこと。女子シングルスは中山（旧姓高木）が、ダブルスでは中山・湯木組が文句なく優勝した。ただ問題なのは勝敗、だれが勝ったではない。その内容だ。

シングルスは、中山がことし古巣の東海女短大をやめて、新天地の弘文堂に転勤したばかりまた結婚したてのこの〝ホヤホり回わすより以上に「この一戦をモノにしたい」という気慨の必要性を感じたのだ。

苦情の二。一大会には必らず一メーカーのシャトルコックを使った方が好ましい。今回は二メーカーのを使ったため、シャットルの弾道が一定せず苦心した選手が多かった。公不公平をなくすため、また敗因がシャトルの違い、などと変ないいわけをして自分を慰めるようなことのないためにもそうしてもらいたい。

注文――。なぜ種目によって最終日がバラバラなのか。たとえば、今大回は十一日に男子シングルス、女子ダブルス、混合ダブルス、十二日に男子ダブルス、女子シングルスの準決勝、決勝が行なわれた。

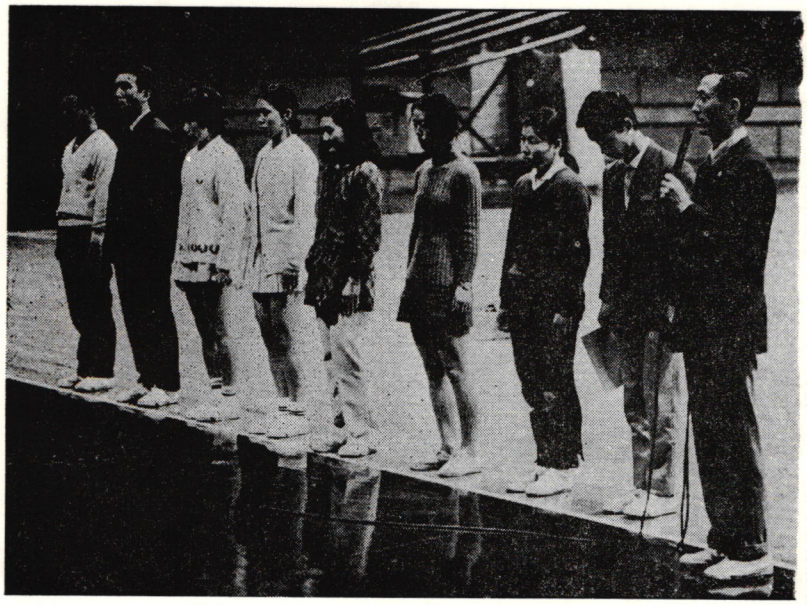
選手は二試合を消化しなくてはならない。バドミントンの運動量は、プロ野球の投手が一試合完投するのと同量といわれる。従って準決勝は心身ともに充実しているが、決勝になるとバテ気味。日程的には各種目の決勝を最終日に持って来るようにしてもらいたい。

関係者はTVなどの関係もあるというが、決勝の好ゲームを放映するならファンも喜ぶが、アゴの出かかった決勝はいただけない。

苦情、注文ばかりではというのではないが、これは〝グッドアイデア〟というのをひとつ。それは最終日の閉会式後、行なわれた選手主催のパーティ。

勝った者、負けた者が集まりワイワイ、ガヤガヤ。とにかくにぎやかだった。初めてのことしは、堺、小島、中山の〝長老格〟が音頭をとって杉田夫妻、高校生プレーヤーまでが参加、協会側からも森友、川端氏ら首脳、OBも加わった。

こんな機会を選手、協会がバドミントンの発展のために腹を割り、将来を話し合う場にしていったら角（かど）が立たず、名案も出て来ると思うのだが…。一回限りとせず、定例の行事として残したいものだ。



▲大会コートでスタンドに紹介されるユ杯選手団

昭和46年度日本バドミントン協会推奨用具

	銘柄名		会社名
ラケットの部	№B-70 セブンティー	¥5,000	河崎ラケット工業株式会社
	№B-69 ブルーリース	¥3,500	〃
	№1,200 スタミナデラックス	¥2,800	〃
	№1,000 スタミナ	¥2,200	〃
	№ 201 ウィニングコース	¥1,500	〃
	№ 206 エバーウィン（張上り）	¥1,200	〃
	№ 208 エバーウィンジュニア（張上り）	¥1,200	〃
	№ ダンロップマックスブレイフォート	¥4,320	株式会社 諸江製作所
	№3,500 キングメイト	¥3,300	〃
	№3,333 ゴールドキング	¥3,000	〃
	№3,000 ゴールドキング	¥2,500	〃
	№2,000 キングクリッパー	¥1,500	〃
	№1,000 シルバーデラックス	¥1,400	〃
	№ 800 ダンディ	¥1,000	〃
	№T—1 エクセレント	¥3,500	大阪合繊株式会社
	№ 2 ハイ・スピード	¥3,500	〃
	№ 3 ハイ・トーマス	¥3,000	〃
	№ 10 フィアレス	¥2,500	〃
	№ 20 プロフェショナル	¥2,000	〃
	№ 30 フェニックス・インペリアル	¥1,500	〃
	№ 80 ビーコック	¥1,000	〃
	№ 90 クラブモデル	¥ 700	〃
	＃8,000 アルミナハイパワー	¥4,000	株式会社ヨネヤマラケット
	＃7,000 アルミナエース	¥4,000	〃
	＃6,500 トップエース	¥3,500	〃
	＃6,000 ファイブエースデラックス	¥3,500	〃
	＃5,000 ファイブエース	¥3,000	〃
	＃4,000 カレッジエイトデラックス	¥2,500	〃
	＃3,000 カレッジエイト	¥2,000	〃
	＃2,000 キングダイヤ	¥1,600	〃
	＃1,000 クィーンハート	¥1,300	〃
	＃ 8 スリーエイト	¥1,000	〃
	＃ 7 ラッキーセブン	¥ 800	〃
	キャリー 7	¥2,500	株式会社 メトロ
	カァルトンラケット 3ポイント7	¥5,800	〃
	カァルトンラケット 3ポイント9	¥4,800	〃
	№4,000 ニューアルバート	¥2,500	株式会社 トヨダスポーツ
	№3,000 ニューブルー	¥2,000	〃
	№2,000 ニューブラック	¥1,500	〃
	№1,000 ニューミニ	¥1,200	〃
	№ 8 ウインナー	¥ 900	〃
ウェアーの部	№ 500 半袖シャツエイトロック（男子）	¥1,200	河崎ラケット工業株式会社
	№ 510 半袖シャツエイトロック（男子）	¥ 900	〃
	№ 518 半袖シャツエイトロック（男子）	¥1,600	〃
	№ 502 長袖シャツエイトロック（男子）	¥1,300	〃
	№ 532 ショートパンツストレッチ	¥1,700	〃
	№ 533 ショートパンツ（男子）インサイドベルト付	¥1,500	〃
	№ 535 ショートパンツ（男子）	¥1,000	〃
	№ 525 長スボンストレッチ（男子）	¥3,000	〃
	№ 500 半袖シャツエイトロック（女子）	¥1,200	〃
	№ 510 半袖シャツ（女子）	¥ 900	〃
	№ 595 スコート（プリーツ）	¥1,100	〃
	№ 592 スコート（ボックス）（ユーパ型）	¥1,500	〃
	№ 590 スコート（フレアー）	¥1,500	〃
	№ 505 ノースリーブシャツ	¥1,200	〃
	№ 502 半袖・長袖シャツ（女子）	¥1,300	〃
	№ 518 ライン入りシャツ（女子）	¥1,600	〃
	＃ 104 ショートパンツ	¥1,600	株式会社ヨネヤマラケット
	＃ 105 ショートパンツ	¥1,400	〃
	＃ 106 ショートパンツ	¥1,100	〃
	＃ 107 シャツ（男子）	¥1,100	〃
	＃ 108 〃	¥1,400	〃
	＃ 109 〃	¥1,500	〃
	＃ 200 ミニスカート	¥1,800	〃
	＃ 201 〃	¥1,600	〃
	＃ 202 〃	¥1,200	〃
	＃ 203 〃	¥1,100	〃
	＃ 204 シャツ（女子）	¥1,400	〃
	＃ 205 〃	¥1,400	〃
	＃ 206 〃	¥1,500	〃
のシューズ部	№ 396 チャンピオン	¥1,300	河崎ラケット工業株式会社
	№ 392 ジュニア	¥ 850	〃
	№ 390 5ポイント	¥1,000	〃
	バドミントンシューズ	¥1,400	株式会社ヨネヤマラケット

日本スポーツ賞、中山・湯木組に

全英など世界のタイトルを独占

はえある一九七一年度の日本スポーツ賞（読売新聞社制定）はバドミントンの中山紀子・湯木博江（弘文堂、河崎ラケット）のダブルスが受賞と決まった。

アマチュアスポーツ界で、その年に一番すぐれた活躍を示した選手や団体に贈られる日本スポーツ賞は、さる十二月二十五日、読売新聞東京本社で開かれた選考委員会（座長・石井光次郎日本体育協会会長）で、三十五競技団体（三団体辞退）から推薦された二十六選手十二チームの候補を審議した。チーム（団体）では特に傑出したものがなく、最後に柳田英明（ヘレスリング＝世界選手権優勝）笹原富美雄（柔道＝同）三宅義行（重量あげ＝同）とバドミントンが残されたあと、満場一致でバドミントンに決まった。

中山・湯木組は、事実上の世界選手権である全英はじめ、全デンマーク、全米、全カナダのタイトルを独占した実力が買われた。表彰式は一月二十九日東京読売ホールで行なわれる。

なお、バドミントンは、さきに69年ユ杯優勝のさい、朝日新聞社が判定するスポーツ賞を受けている。

◆選考事情◆

まず石井委員を座長に選んだあと個人、団体に分けて選考にはいった。個人では、二十三競技、二十六選手のなかから水泳・西側、レスリング・柳田、柔道・笹原、バドミントン・中山・湯木、重量あげ・三宅弟スキー・笠谷などが選考の対象に選ばれたが、団体は「世界を制したチームがなく、しかも、個人の候補に匹敵するものなし」（東俊郎委員）との意見が出て、個人にしぼって検討することになった。

個人の六競技、七人で再び審議が続けられ、このなかから水泳の西側は「昨年の受賞者であり、世界にはまだあと一歩」（田畑委員）またはスキーは「札幌五輪が残されている」（内村委員）などの理由から、除外された。

続いて田畑委員から「レスリング、重量あげ、柔道の三競技から選んではどうか」との提案があったが「いずれも成績では甲乙つけがたい」との意見が多数を占めた。

ここで永野、清瀬両委員から「バドミントンは、事実上、個人の世界選手権である全英選手権大会をはじめ全日本をはじめ全日本などのタイトルを独占しており、ほかの競技と同レベルなら考慮すべきだ」とそれぞれ発言。東（俊）委員からも「日本ではこれまであまり人気はなかったが、世界連盟には六十か国が加盟している大きな競技だ」と意見が述べられ、結局「四十四年には柔道と最後まで受賞をせり合った実績もあることだし、日本スポーツ賞の選考基準には新しいスポーツを奨励するという意味もある」との内村委員の意見に全員が賛成。満場一致でバドミントンの中山・湯木両選手が受賞者に決まったもの。

"やっと認められたわ"

ホオをそめ決意も新た

「エッ、わたしたちに日本スポーツ賞を？　ほんとうですか」――早大記念会堂で練習中の中山と湯木は、こういって顔を見合わせると、しばらく言葉が出なかった。そして興奮を押えたように中山がいう。「正直いって、四十一年にユーバー杯世界選手権で初優勝したとき、日本スポーツ賞をもらえるんじゃないかとかってたんです。でももらえなかった。三年後に二連勝したとき〝こんどは……と思ったんですが、やはりダメ。来年六月に三連勝してこんどこそ、と思っていたやさきでした。ことしの戦績と同時に、過去のユーバー杯の成績も認められたような気がします」

そのそばで湯木は「わたしが受賞したというより、バドミントンが認められたことがうれしい」とホオを紅潮させた。「ボクは何となくもらえるような気がしたな」とナショナル・チームのコーチ、堺栄一氏もうれしそう。明年六月にユーバー杯三度目の防衛戦をする日本女子チームにとってまたとない激励のひとムチといえるだろう。

二人がダブルスのペアを組んだのは、四十四年のユーバー杯初防衛戦のとき。「シングルは強いがダブルスは下手だ」といわれた日本チームとしては、シングルスのエース級二人を組み合わせて、強力ダブルスをつくる以外に方法がなかった

世界一正確で、頭脳的なプレーをするといわれる中山と、強打で知られる湯木のコンビは、たちまち世界のナンバー・ワン・ダブルスとして認められ、世界タイトル初防衛の原動力となったほか、四十年の全デンマーク選手権にも優勝した。昨年は湯木がアキレスけんを切ったため、海外での活躍はなかったが、ことしの春のヨーロッパ遠征で事実上個人世界選手権といわれる全英選手権をはじめ全デンマーク、全カナダ、全米のダブルスで優勝、さる十一月の全日本でも優勝した。つまり、ことし世界で行なわれた主要大会のすべてのタイトルを独占したシングルスでも中山が全デンマーク、全米、全日本、湯木が全カナダのタイトルをとり、二人で世界の女子バドミントン界を制した感じだった。明年の世界選手権で、アメリカについで史上二度目の三連勝をするかどうかは、この二人の活躍いかんにかかっているといえるだろう。

ユーバー杯へ大きなはげみ

川端昇市・日本バドミントン協会理事長の話「初めて日本一の賞をいただき、非常な名誉に思う。来年一月にはデンマークの女子チームを日本に呼び、六月には東京でユーバー杯（女子団体世界選手権）が開かれるが、二つの大会にいどむ女子陣は、この受賞に恥じない活躍をしてくれるだろう。

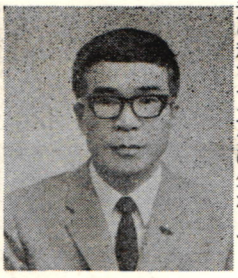
このページは12月26日付け読売新聞を再編したものです。

特集

迎えた〝決戦〟の年
近づくユ杯、三度目の勝利へ

敵を知り、おのれを高め

監督　毛利清志



昨年、第六回ユ杯チームの監督という身に余る重責を命ぜられ、半年前に、ようやく合宿のスタートができて、早くも決戦の年を迎えてしまった。

前回に引き続いて、東京で対戦できることになったので、地元の利を十二分に生かして、ユ杯三連勝をなしとげ、皆様の期待に応えたい決意である。

対戦チームの予想としては、六月七日の準決勝がヨーロッパゾーンであるが、前回も代表権を得てインター・ゾーンに駒を進めたベテラン揃いのイギリスか、最近、台頭いちじるしいといわれているデンマークのいずれかであろう。

一方から決勝に勝ち進んで来るのは、アジア、アメリカ、オーストラレーシア各ゾーンの勝者であるが、前回同様、ベテラン、新鋭と層の厚いインドネシアの公算が大きい。

さて、わが日本チームであるが、三年前の第五回においてタイトル防衛の後、主力選手の相次ぐ負傷など、いくつかの問題にぶつかってきた。それらをどのように解決して、チームづくりをするかが、大きな課題である。

幸いにも、今回三度目のキャプテンをつとめることになった中山選手は、初の国際的ミセス選手として、きわめて好調裡にチームをリードしている。

湯木選手の足も完全に近い復調ぶりで頼もしい。この前回体験者二人を中心に、勝つためのチームを構成しなければならない。

すなわち、少なくとも3複・4単を甲乙つけがたいほどの力量に仕上げていき、二度にわたる試合において、対戦チームや、各選手のようすを見て単3・複2を起用したいと思う。

そのためには対デンマーク戦（一月下旬～二月上旬）とヨーロッパ遠征（三月）等においてできるだけ多くの国際経験を身につけさせて、自信を高めていく。

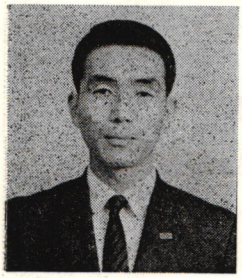
一方、ヨーロッパ遠征では、イギリス、インドネシア、その他、各国の敵状偵察も十二分におこなって、六月の本番へ備えての仕上げの資料としなければならない。

幸にも、心技両面については、堺コーチの好指導があり、山本主務の行き届いたマネージメントとあいまって、チームワークもガッチリ固まりつつある。

これからは、前記の各種課題を、より効果的に消化吸収し、個々の選手の内容を、より充実して、名実共に世界一のチーム作りに専念したい所存である。

残る課題ダブルスの強化

コーチ　堺　栄一



いよいよ決戦の年になった。ユ杯チームのコーチという重大な任務を与えられ、教えることの難しさを痛感しながらコートに入って、身体で感じてもらおうと、一生懸命、がんばり、昨年おこなった二回の強化合宿で、何とか各選手のようすがつかめた状態である。

これからは、課題であるダブルスの強化に力を入れ、全英選手権を獲得したとはいえ、まだ甘さのある中山、湯木に、ダブルスとしての強さを求めたい。

また復調間近かを思わせる竹中も、本来の調子には遠いため、相沢とのコンビもいま一歩であるから、高坂、柴山、高崎石崎等、これに続く選手も、徹底的に鍛えて、どんな状態においても、二組の差が出来ないように努力したい。シングルスでは、全盛時に近いまで復調した中山、力強さに安定性を増した湯木、精神的に大きく成長した相沢の三人に、柴山、高坂、復調待ちの竹中と層が厚いので、心配はしていない。

さらに一月末の対デンマーク戦、三月の全英選手権と、若手に国際試合の経験をさせ、四、五月の合宿で仕上げ、本番に臨むつもりである。

しかし、いくらチームの強化をしても、トマス杯でのにがい経験からして、敵を知らなければ万千とはいえない。でき得る限り、各ゾーン代表チームの情報を見聞し、戦力分析を図り、対処したい。

防衛ではなく、もう一度勝ち取るべくがんばっている。

“選手を信じ、打って一丸”

ユ杯候補チーム、新春合宿座談会

…なにがなんでも栄光の座、三たび勝ちとろう…

ユ杯の防衛戦が、あと半年後に迫った。この大会は、ある意味で、バドミントン競技の興亡をかけた一戦ともいえる。

もちろん、自他ともに許す女子王国日本は、今度も堂々と優勝し、その声価を高めるだろうが、当の選手団の決意はどうか。新春早々、長崎で開かれた第三次強化合宿の時間をさいて、抱負を語ってもらった。

〈出席者〉

選手
中山紀子
湯木博江
相沢マチ子
竹中悦子
高坂薫
柴山きよ子
高崎弘子
石崎茂子

合宿要員
堀川栄美子
秋本八代美
西尾真理子
佐伯智子

役員
毛利清志
堺栄一
山本洋彦（司会）

まだピンと来ない〝実感〟

――ユ杯に臨む抱負、というのが、この座談会の大きなテーマです。そこで、みんながユ杯をどう受けとめているか、順にひとことずつ、おしゃべりしてほしい。

キャプテンから発言すると、まとまるものも、まとまらなくなる恐れがあるから、順序を逆にしよう。

堺 合宿に参加している人々の中でも、年代や経験によってユ杯に対する意識の差があると思うんだ。そのへんが出てくれば面白いね。

――じゃあ、ハチ（秋本）あたりから

秋本 エヘン（セキばらい）あのね、ユ杯は最も大きな試合でしょ……

――女子にとってのね。

秋本 そう、女子にとっての最も大きな試合だから、ぜひ防衛してもらいたいし、機会があれば一度は経験してみたいと思ってます。

――それだけ？　まあ、いいや、つぎ、西尾さん

西尾 私もね、同じです。

――同じって

西尾 考えていることが…日本はすでに一回防衛しているし、バドミントン・プレーヤーにとっては〝理想〟みたいなものでしょう。ぜひ防衛していただきたいし、私たちは、それに協力している、といってはおかしいけれど、後押ししているんだ、と思ってます。

佐伯 やっぱりね、ピンとこないんだけど、合宿に参加させていただいて、その空気にふれただけでも、よかったと思うんです。ユ杯は最高のユメなので、自分でも出たい気持ちはもっているし、防衛していただきたいっていうことです。

――防衛してもらうんじゃなくて、自分たちで防衛する、っていうことだよね。

佐伯 そうですね、私たちがいま、合宿でいろいろ勉強して次に続く人になれるようにする、ということが、お手伝いしていることになるんでしょ（笑）そういう気持ちです。

――じゃあ、次に堀川さん。

堀川 私は、この前の大会は決勝しか見なかったんです。相手チームのことは見なくて、日本のことしか追っていなかったので、他のチームと日本の比較なんかまでは気がまわらなかったんですよね。どう、せり合うとか…せり合うといいますよネ

バドへの認識も高めたい

――いいよ、せり合うで（笑）日本語になっているよ。

堀川 ということで、日本は強いんだナ、って印象づけられた。だから、考えてみれば、全日本の試合なんかでも、世界選手権と同じレベル、内容のものが見られたんだ、と……

この合宿に参加できたのは、だから、とても光栄だと、そうは考えていないんだけど（笑）本当のところは、やはりうれしかったんです。候補の中にはいりたかったのが本音で、でも、まだ、その気持ちは捨ててないですからね。

――いいぞ、その気持ちでやってもらいましょう。じゃあ、



つぎ、柴山さん。

柴山　私はね、一般の人々の間では、バドミントンが、まだハネつき程度の認識しかないでしょう。それをなくして、日本全体のものになるようなことに役立てばいいな、と思ってるんです。

まあ、それから、自分としては一度は試合に出て、ユ杯はすばらしいものだナっていうことを味わってみたいけど。

今度は〝絶対やってやろう〟

――柴山さんのパートナーとして、どうですか。

高崎　そうですね、柴山さんと同じ意見なんだけど……。何とか一角にはいりこんで、勉強したいと思ってます（小声）

――じゃあ、相沢さん

相沢　前回も候補だけど、実際にはプレーしなかったわけです。だから、今度こそは絶対やりたいと思っています。

その反面、すごく不安みたいなものがあって、あの、ほかの選手のみなさんを信じられないという意味じゃなくて、自分がまだまだ未熟だし、力が足りないから…どこまで自分を持っていって、カバーできるか…自分としては大きな課題を背負っていると思っています。

――パートナーの竹中さん、

――なるほど。もう少し自分の心意気みたいなものをいってみてよ。

柴山　うーん、私たちはまだ若いでしょ、若いわよね（笑）だから、若いなりのファイトを持ってぶつかっていきたい。

――じゃ、若くない人？　に聞いてみようか。いや、若い人がまだいた、高崎さん。

今度のユ杯のことは、前回の大会が終わってから、ずっと考えてきたテーマです。それがあと半年後に、迫ったわけですが、残る期間に、自分を燃焼し切れるよう、悔いのない生活を送りたいと思っています。

――うわあ、すごくロマンがあるというか、文学的な表現ですね。

じゃ、石崎さんはいかがですか。かなり上位陣に肉薄しているというウワサもちらほらあるようですが。

石崎　はあ？（笑）

――これはテレビじゃないから映らないんだよ、声を出さなきゃあ。

石崎　いやあ……

――あとにするとかなんとかいわなきゃ。じゃあ、さきに、ほかの人にいきましょうか。

柴山さんとダブルスを組んで進境いちじるしいといわれる高坂さんは、どう？

大部いろいろ、ご苦労なさったようで。もう大丈夫ですか。

竹中　はい、半年以上ものあいだ、みなさんにご迷惑やら、ご心配やらおかけして、申しわけありませんでした。

まずは体調をととのえ、もとの状態にもどし、さらに新しいものを身につけていかなければと思っています。どこまでやれるか……。

朝晩、ユ杯を手でさわれば

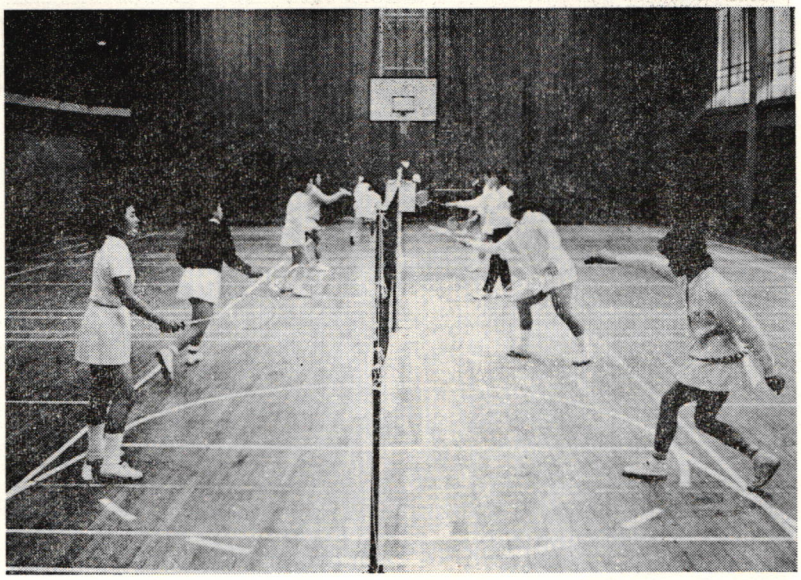
高坂　ほんとのところ、まだ実感がわかない。身近にユ杯を感じないんです。ユ杯の合宿というより、バドミントンの合宿という感じが持てないんです。実感としてわいてこないのがいつわらざる気持ちです。

――うーん、全体として聞いていると、まだ意識が足りないようだね。

堺、毛利　じゃあ、毎日テーブルの上にユーバー杯を飾っておいて、朝晩、さわってもらおうか。そうすれば実感がだんだ

ん出てくるんじゃないかナ。

一同　きゃあ、賛成。



▲　ネットプレーの練習

"防衛"ではなく"取る"決意

――ところで湯木さん、精神鍛錬の方はいかがですか。

湯木　まだまだです。

――湯木さんの場合は、やっぱり例の話が出てきちゃうんだよネ（前回のユ杯戦で対インドネシアの一番バッターに起用され、こちこちで負けたこと）ユ杯が続くかぎり、引き合いに出されちゃうね。

湯木　前回は初めて出させてもらい、一番、年下だったんですけど、今回は中山先生もおられるとはいえ、上に立つ立ち場なので、それらしくやらなければの気持ちを持っています。前回のようなことはくり返さない、何が何でも勝たなければ。

――ミナルニ（インドネシアのエース）に対しては、どうですか。

湯木　前回のアジア大会（バンコク）で当たり、一度勝って二度目も相手のケガというアクシデントがあって、ヘンな勝ち方だったけれども勝てた。このときはうれしかったです。今度は堂々と勝ちたい。

――キャプテン、日本は六月七日に、まず欧州ゾーンの代表と当たるわけですが、相手はどこになるでしょうか。

中山　デンマークか英国でしょうね。英国はダブルス、デンマークはシングルスが強いという特色があります。アジアからはインドネシアでしょう。

――名コーチさん、選手たちにあれやこれや注文も多いことでしょうが、秘策のほどはどうですか。バド界は海外へも流されているから、大事な話はあまりしゃべらん方がいいけど…。

堺　私は迷う方のコーチで。いや、教えるより、いっしょにやろうと考えてやってきた。三回目の合宿で、ようやく、みん



▲じぐざぐステップでフットワークのトレーニング

なのプレーぶりが頭の中に定着するようになった段階です。

ひとつだけいうと、さっきから出ている防衛するのではなくもう一回、スタートからやって、ユ杯をとるんだ、という考え方でいきたい。コートではきびしく、また自分にはきびしく、他人にはやさしく、仲よくやっていきたい。

――これから対デンマーク戦や海外遠征もあるわけですね。

〝本番〟へどう力をつなげていくか、監督さんの抱負を。

毛利　選手、役員、それぞれが、自分の立ち場で役目を果たしてくれることが、防衛につながる。選手を信頼し、一心同体でやりたい。そのムードは固まりつつあると思う。

今回は前回よりも、経験者が少ないなど客観情勢はきびしいものがある。しかし、一丸となって、切り抜けていくことが課題だと思う。

カゲの力に感謝しよう

――あとまわしになった石崎さん、いかが。

石崎　まだまだ未熟なので先輩へ一歩でも近ずき、一つでも二つでも身につけたい。

――キャプテンは

中山　ユ杯はこれで三回目の出場になるわけです。私自身もその間、いろんな考え方が変わってきたことを感じています。

今回は経験者が少いので、ピンと来ないということもわかります。私自身も最初は大試合への実感というものがなかったことを思い出します。しかし、実際のユ杯を知らなくても、合宿を重ねるうちにわかってくるものだと思う。コートにはいったら、勝つことしか考えない、自信をもって当たれば、勝てるし勝ちたい。

山本　では最後に司会者自身でしめくくろう。カゲの力に感謝しようということをいいたい。合宿の内外で世話してくれる人、激励に来る人、こうした見えない力になる人々もふくめ、ユ杯は我々だけじゃなく、日本のみんなで守る、とるんだという心を忘れないようにしよう。



▲重い尻を背に筋力増強？



ユ杯選手の体力、運動能力を採点する

日本体育大学
関根義雄

ユ杯候補選手団（負傷中の竹中を除く）は、さる九月末、一日だけの第一次合宿のさい、体力と運動能力のテストを実施した。その結果について、日体大の関根義雄先生に、とりまとめて考察していただいた。

バドミントンの選手の体力診断および運動能力の検査結果を21才女子と比較しますと、伏臥上体そらし、斜め懸垂屈伸を除くほかの全ての項目において大変優れております。

伏臥上体そらしにつきましては、バド界24号中で述べておりますように、他のスポーツ選手と比較しても劣っておりましたが、一般の人達と比較すれば1センチの差があります。

斜めの懸垂屈伸につきましては、バドミントンの運動は屈腕でなく伸展に力をつかうため、懸垂姿勢での上体と腕の角度が少し違う（正しくは90度）ことにより回数が大きく変ってくるためと思います。

日体大バドミントン部員（レギュラー5人）と比較しますと、やや日体大の方が優れております。日体大の場合にはバドミントン以外に多くのスポーツを行ないますので、その効果が現われているものと思います。

つぎに、他のスポーツ選手との比較をメキシコ・オリンピックに参加したバレー、体操の選手について行ないますと、バレーは反復横とび、垂直とびに、体操は柔軟性に、その競技の特性を示しておりますが、バドミントンは、同じく、世界のトップレベルで活躍しながらも、全体的にみて体操、バレーよりも劣っているようです。

バドミントン競技の勝敗に大きく関与する心肺系の持久性をあらわす踏み台昇降が劣っていることが気になります。この点、ユ杯の合宿などで縄とびを利用し、いろいろと負荷を変えてインターバル・トレーニング法により実施していることが良い結果をもたらすことと思います。

合宿以外の時にでも各自で一日おきぐらいに実施したらさらに効果が大きくなるでしょう。

また、他の競技に比較して握力における左右差が大きくなっておりますが、これはバドミントン選手の特徴のひとつともいえましょう。

◎中山選手

中山選手は中学時代には陸上競技の選手だったそうですが、垂直とび、50m走、走り幅とび、持久走などから走の強さが目につきます。長い間トップ・プレーヤーとして活躍しておられる要因はこの辺にあるかもしれません。

しかし、心肺系の効率を示す踏み台昇降がやや劣ることが気になります。トレーニング方法としてはランニング、ナワとび、フットワークの時等にスピードに変化を与えてインターバル・トレーニング法で、実施してみたら効果があると思います。

◎湯木選手

アキレス腱切断の影響でしょうか、今回の測定においても足をかばっているようすがみられユ杯チームの中では、垂直とび50m走が劣っております。

しかし、湯木選手のスピーディなムダのないフットワークによるプレーは、まわりで見ていても恐しいほどの迫力があります。これからのち、特にウォームアップに気を配り、足の負傷の回復につとめ、常にベストの状態で安心して練習を行ない、いつでも自分の持っているものを、全て出せるように努めたら良いと思います。

◎相沢選手

T得点をごらんになればおわかりになると思いますが、柔軟性（伏臥上体そらし、特に立位前屈）を除くと、ユ杯チームの平均値に近い検査結果を示しております。柔軟性が劣ることが、プレーの硬さの一つの要因になっているかと思います。

柔軟性を増すためには、身体があたたまった状態（練習後、湯上がり時）の時に、各関節を種々の方向に屈伸させると効果があります。また脱力の練習も加えたら良いと思います。

◎高坂選手

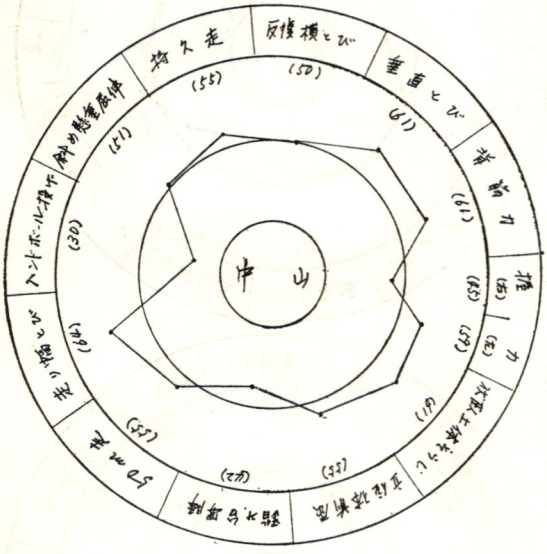
相沢選手とは反対に柔軟性が優れております。これが高坂選手のあの、やわらかいプレーの要因になっていると思います。しかし筋力、心肺系の検査は、他に比べてかなり劣っております。

筋力を強化する方法としては、強化する部位を1日に1回、

運動能力テスト

50m走（秒）	走り幅とび（cm）	ハンドボール投げ（m）	斜め懸垂屈伸（回）	持久走（分・秒）
7″8	412	20.5	25	3′57″
9″2	345	21.5	21	4′06″
8″0	370	21.0	23	4′09″
8″5	358	21.5	17	4′12″
7″4	382	23.0	36	3′30″
7″6	320	23.0	18	4′30″
7″9	360	21.0	30	4′32″
8″1	364	21.6	24	4′08″
9″2	313	17.5	28	5′13″

測定項目 / 氏名	体力診断テスト							
	反復横とび (回)	垂直とび (cm)	背筋力 (kg)	握力 (右) (kg)	握力 (左) (kg)	伏臥上体そらし (cm)	立位体前屈 (cm)	踏み台昇降 (点)
中山紀子	40	47.0	112	37.0	33.0	57	18.0	71.4
湯木博江	41	37.0	103	37.5	31.0	51	20.0	84.1
相沢マチ子	41	42.0	100	39.0	32.0	51	12.0	73.9
高坂薫	40	41.0	90	35.0	31.0	58	18.5	68.2
柴山きよ子	41	45.0	115	43.0	30.0	50	15.0	78.2
高崎弘子	39	44.0	100	40.0	26.0	55	16.0	79.6
石崎茂子	39	45.0	95	37.0	32.0	48	15.0	76.2
ユ杯チーム平均	40	43.0	102	38.4	30.7	53	16.4	75.9
一般人(21才)	35	36.2	82	29.3		54	15.5	58.4
日体大バト	40	44.0	123	40.6	31.6	54	15.1	106.0
体操競技	38	51.6	106	33.7	32.4	63	28.0	112.7
バレーボール	44	52.1	113	39.5	37.0	59	17.8	105.5



※一般人21才，女子は昭和45年度体力・運動能力調査報告書　文部省体育局による。
※体操，バレーは第19回メキシコオリンピック日本代表選手体力測定結果　財団法人日本体育協会スポーツ科学委員会による。

6秒間だけ全力で緊張させると大きな効果があるという短時間に行なえるアイソメトリックというトレーニング方法もありますが、しかし、よりバドミントンに近い形で、ダイナミックなトレーニングを行なうのも良いと思います。たとえば、重いラケットを使ってのスイングなども効果があるでしょう。

◎柴山選手

柔軟性と左手の握力を除いた他の全ての測定項目において優れております。柔軟性のトレーニングを行なう一方、他のトップ・プレーヤーとより多く試合を行なうことにより、試合におけるリズム、かけひきを身につけると同時に、自分の得意なパターンの形成やイメージ・トレーニングを行なうと良いと思います。

◎高崎選手

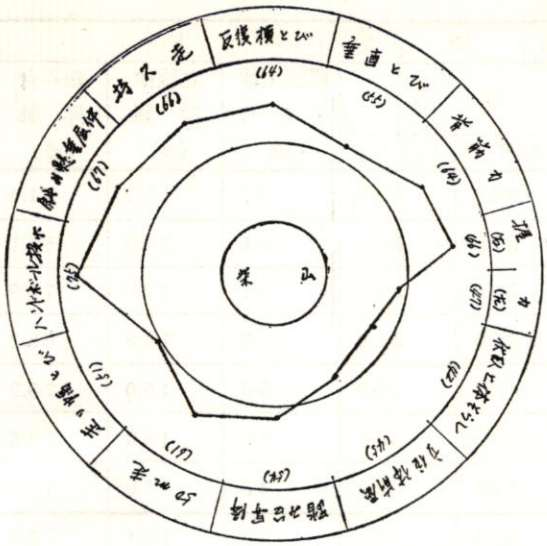
心肺系の検査結果が優れているのに、持久走が劣り、また、斜め懸垂屈伸が劣る点などから筋持久力が劣っているものと推察できます。トレーニングとしては、無酸素的持久力を高めることが大切で、一〇〇m～二〇〇mの全力走を、充分な休息をはさみながら、日に5～6回ぐらい走るようにしたら良いと思います。

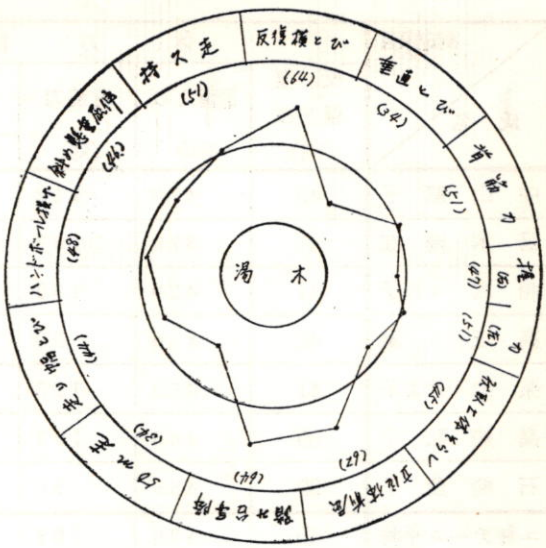
◎石崎選手

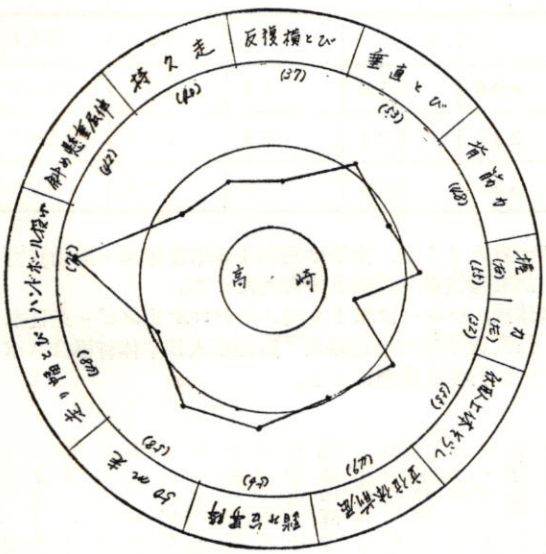
筋力系と柔軟性がやや劣っているようです。トレーニング方法については、前に述べた通りです。

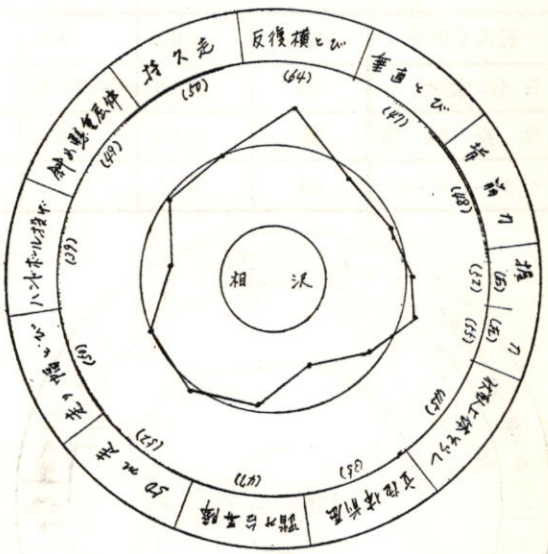
以上、各選手の諸傾向からみますと、これらの能力の向上について、全員に一律のトレーニングを施す時期ではないと思います。全員が等しく弱い能力は別として、各自が一日おきぐらいに、自主的なトレーニングで補強すれば、現在のユ杯チームの平均値ぐらいまで強化できると思います。

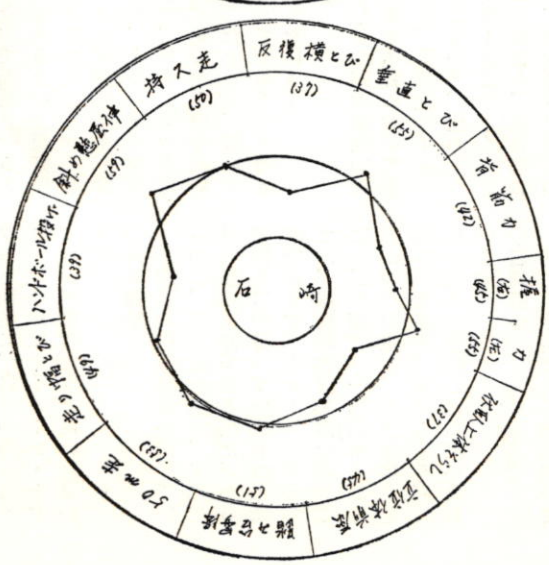
（次ページ参照）

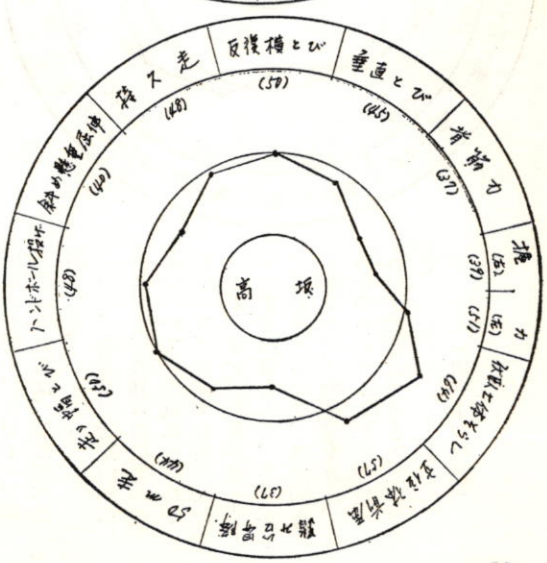

反復横とび
垂直とび
背筋力
握力
立ち幅とび
踏み台昇降
立位体前屈
上体おこし
伸脚
持久走
ハンドボール投げ
ソフトボール投げ
平均


反復横とび
垂直とび
背筋力
握力
上体おこし
立位体前屈
踏み台昇降
立ち幅とび
ハンドボール投げ
ソフトボール投げ
伸脚
持久走
湯木


反復横とび
垂直とび
背筋力
握力
上体おこし
立位体前屈
踏み台昇降
立ち幅とび
ハンドボール投げ
ソフトボール投げ
伸脚
持久走
高崎

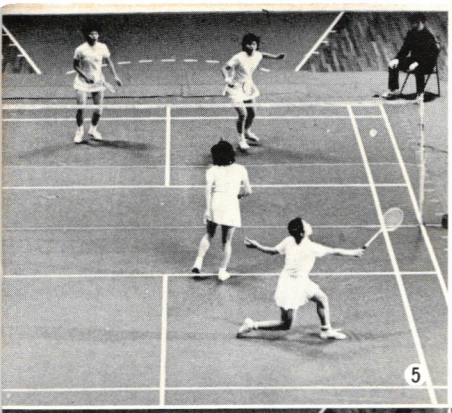

反復横とび
垂直とび
背筋力
握力
上体おこし
立位体前屈
踏み台昇降
立ち幅とび
ハンドボール投げ
ソフトボール投げ
伸脚
持久走
相沢

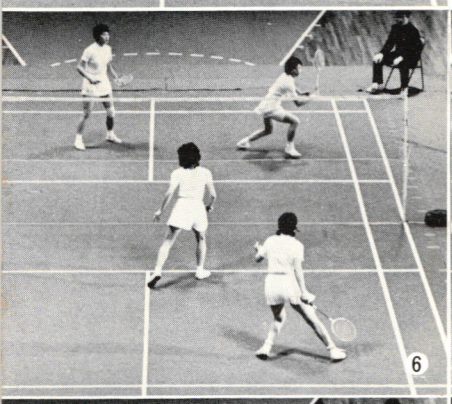

反復横とび
垂直とび
背筋力
握力
上体おこし
立位体前屈
踏み台昇降
立ち幅とび
ハンドボール投げ
ソフトボール投げ
伸脚
持久走
石崎

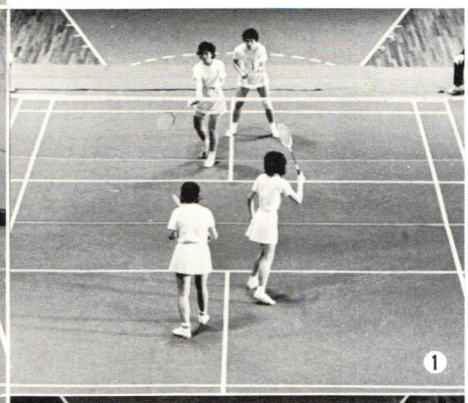

反復横とび
垂直とび
背筋力
握力
上体おこし
立位体前屈
踏み台昇降
立ち幅とび
ハンドボール投げ
ソフトボール投げ
伸脚
持久走
坂高

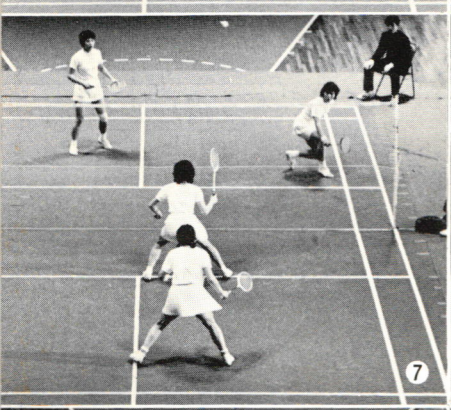
昭和46年度
全日本総合選手権大会
《女子ダブルス決勝》

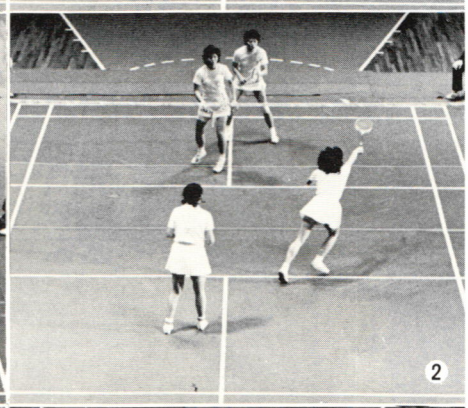
中山・湯木 —— 相沢・竹中
（その1）

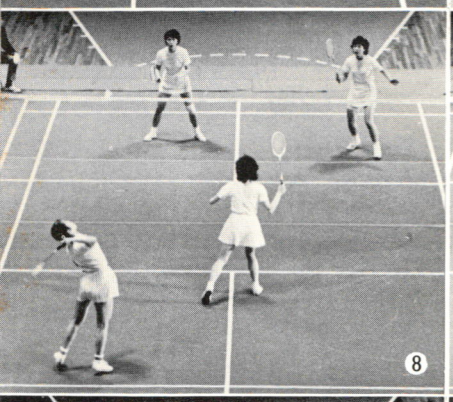


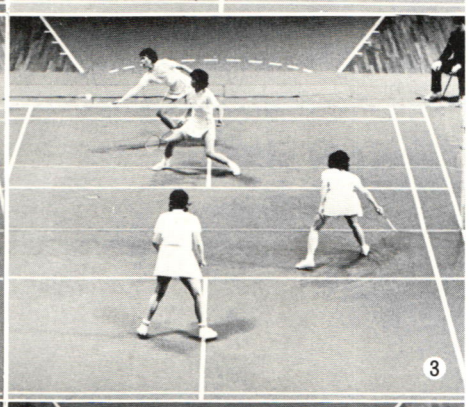


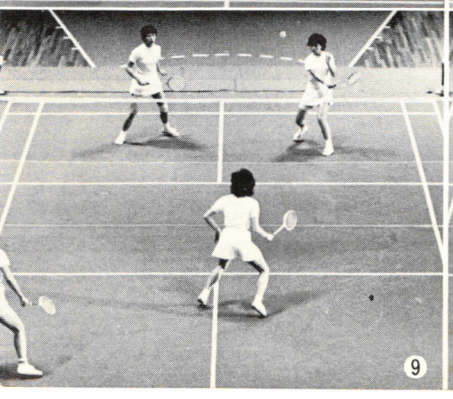


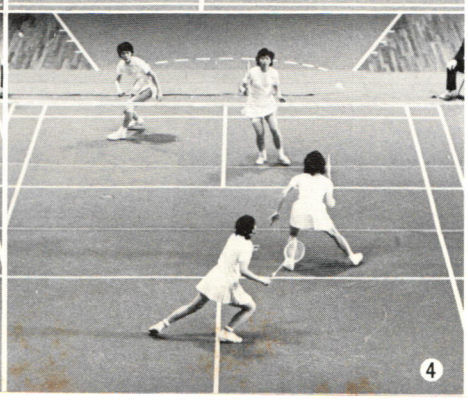












①サーバー・相沢、レシーバー・中山。

②相沢のショート・サービスは少々浮き気味、中山すかさずネットへつっこみプッシュ！、相沢組のフォア・サイドを鋭くつく。

③④虚をつかれた竹中、辛じてこれに追い付き、くずれた態勢でレシーブ、しかしラケットをうまく返し、ハーフ・スピードでクロスに打ち返して、体勢のばん回をはかる。

⑤湯木、これをとらえ、逆にサイド・ラインに側って相沢のバック・サイドへ送り込む。

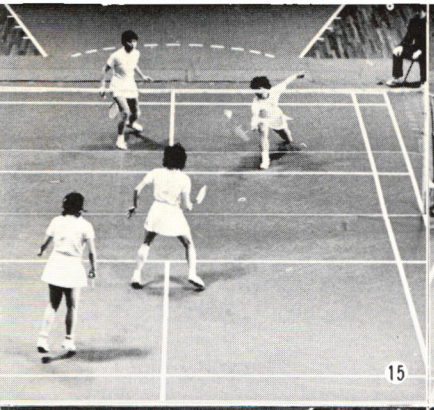
⑥、⑦やゝ押し込まれた相沢はバック・ハンドでこれを処理するも、ポップ・フライとなり相手コートへ。

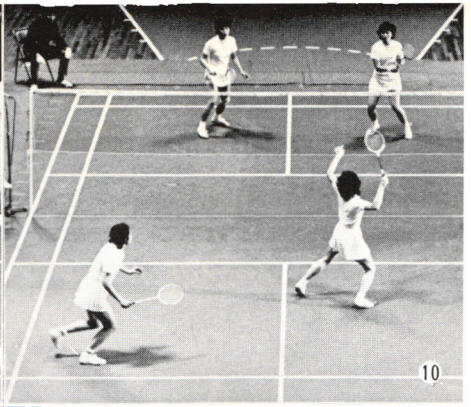
（絶好の返球に中山組はすかさず、トップ・アンド・バックの攻撃体型をとる。一方の相沢組は、あきらかに相手側に有利な返球となったため、スマッシュ攻撃に備え、サイド・バイ・サイドの防御体型）

⑧湯木、満身の力を込めてスマッシュ、コースは理想的に相手2人の真中をついたが肩に力が入っていたためか、角度がつかず、タマ足がのびる。

⑨相沢、フォア・ハンドでこれをはじき返すが、またもポップ・フライ

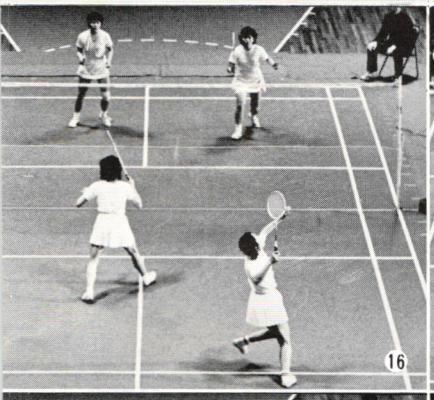
（中山組の優位が続く）

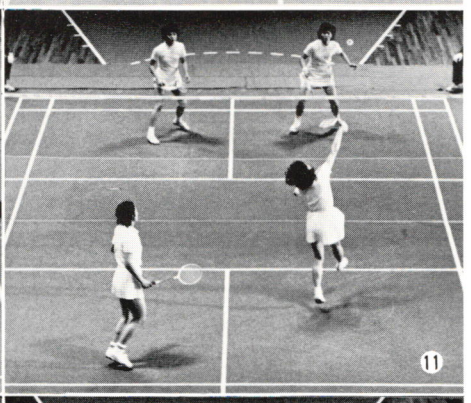




⑩、⑪返球が浅かったために、前衛の中山がジャンプ・スマッシュ！、相手のバック・サイド側を狙う。

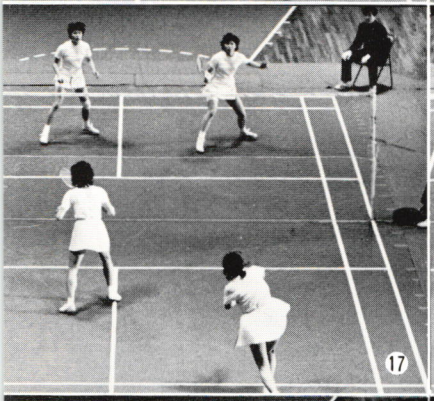
⑫、⑬相沢、上体を捻りながらバック・ハンドでレシーブ。スマッシュ・レシーブのため球勢に押され、シャトルは再度ポップ・フライで相手コートへ、（相沢組は完全に受身、中山組とは対照的）

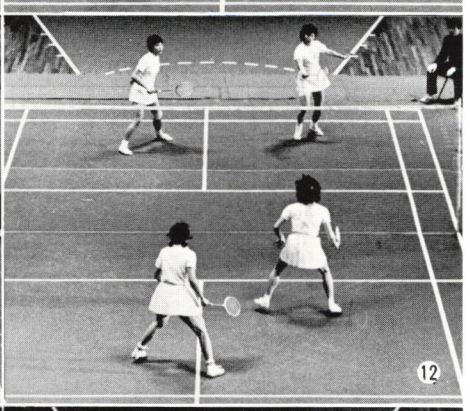




⑭相沢組がスマッシュ攻撃を予測して、やゝ後方に守りを固めているのをみてとった湯木は、スマッシュとみせかけ、ドロップ・ショットを放つ。

⑮ややフェイント気味のこのショットに一瞬決ったかに思えたが、相沢よく踏み込んでこれを拾うも態勢がくずれているので、





たて直す時をかせぐため高く大きく打ち上げる。

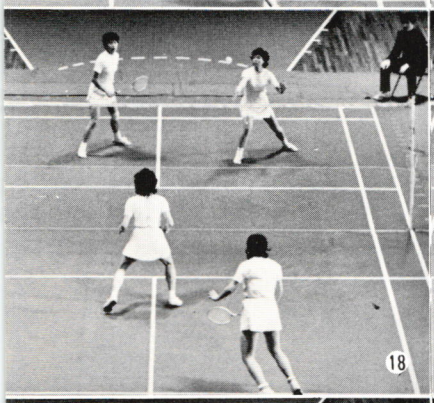
（再度、優位な球が返ってきたので好機とばかり中山組は攻勢にかかる）

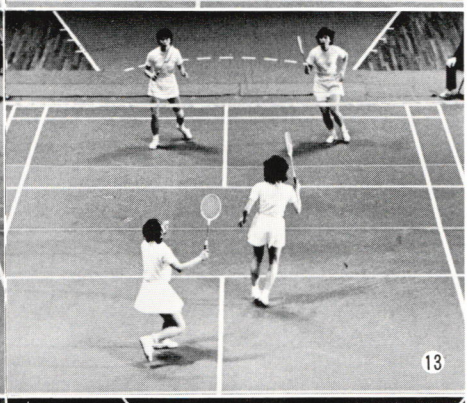
⑯、⑰湯木、スマッシュ！

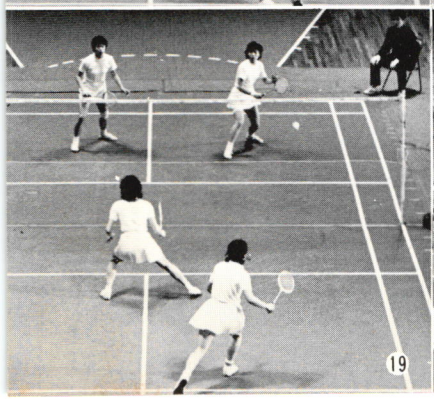
（防御に追い込まれた相沢組、何とか逆転の機をうかがう）

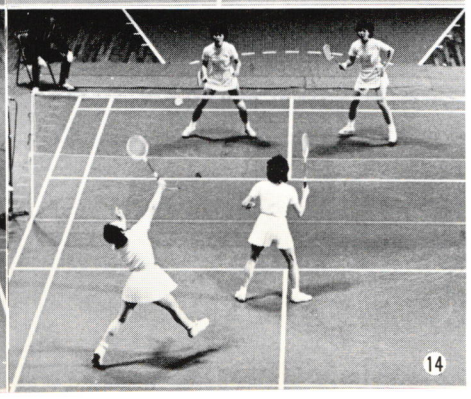
⑱、⑲相沢、このスマッシュを待ってとらずに、一歩踏み込んでレシーブ、肩口あたりで、うまくこれをとらえた相沢はシャトルのいきおいを殺して（ストップ・レシーブ）、ネットへ落す。

（防御から攻撃への切り返しをはかる）









⑳多少スタートのおくれた湯木は、これをクロス・ネットでのがれようとする。

㉑、㉒竹中、このクロス・ネットを察知し、鋭くネット際へダッシュ、高い位置でこれをとらえ、クロス・ネットで振る。

㉓、㉔竹中のスピードある出足をみて、プッシュを予測したか中山、一瞬出遅れたため、態勢の立て直しをはかり、高く大きく打ちあげ、のがれる。

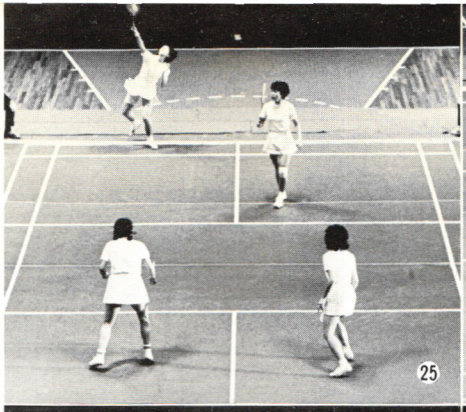
（この時点で優劣の立場は逆転し、相沢組に優位な返球となり相沢組がトップ・アンド・バックの攻撃体型となる、中山組はセオリーどうり、サイド・バイ・サイドで相手の攻撃に備える）

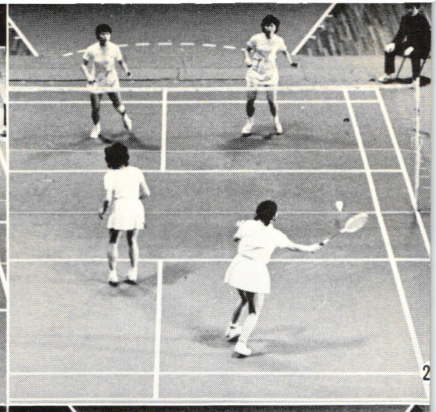
㉕相沢、中山・湯木の真中をめがけて魂身の力を込めてスマッシュ！

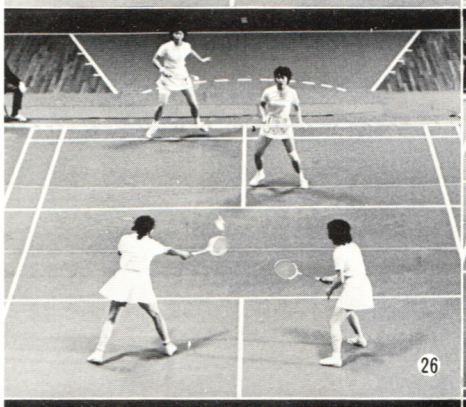
㉖湯木、フォア・ハンドでこれをレシーブ、ストレートで相沢のフォア・サイドへ切り返す。

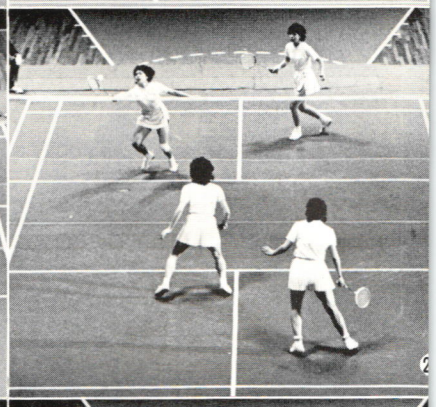
㉗、㉘相沢はサイドから横なぐり気味にこれをレシーブしたが返球は浅く、絶好の攻撃チャンスを与えてしまう。

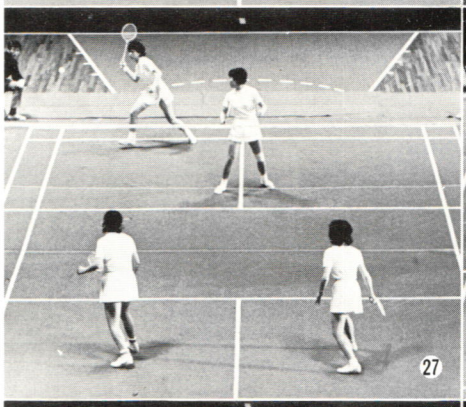
㉙湯木、強烈なスマッシュ！竹中のバック・サイドを狙う。

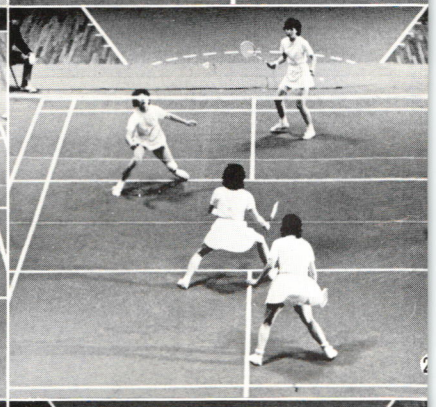


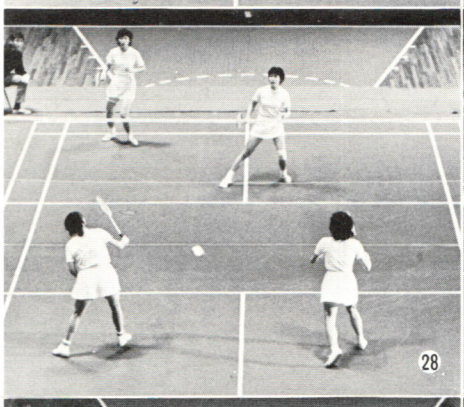


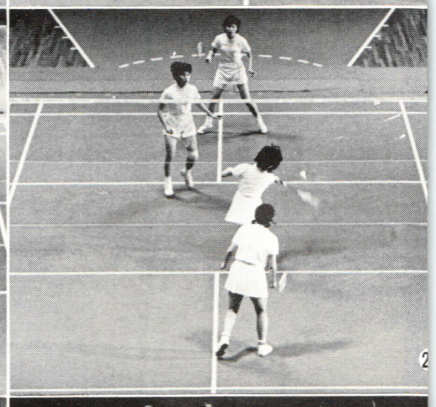


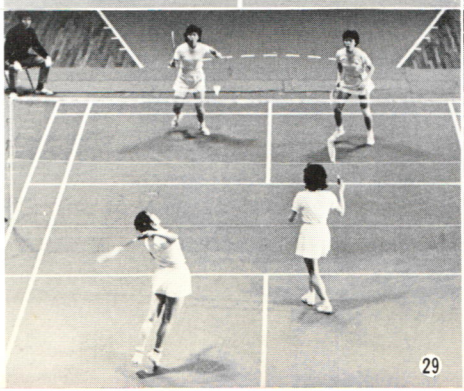


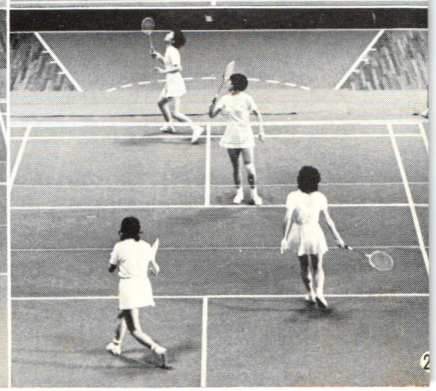


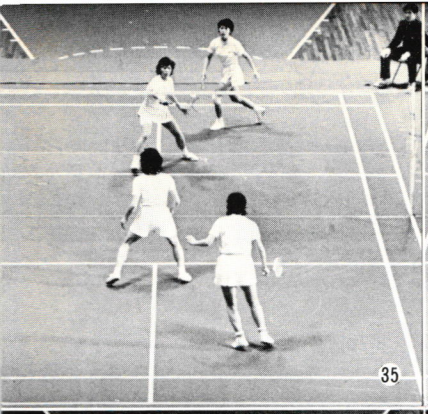


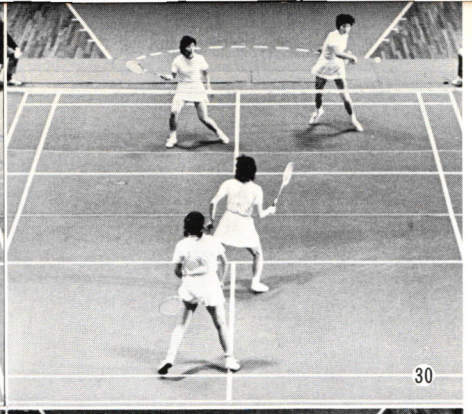








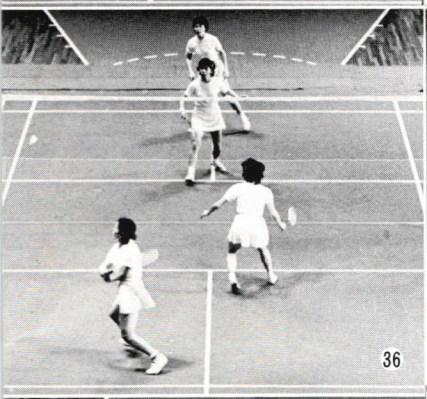


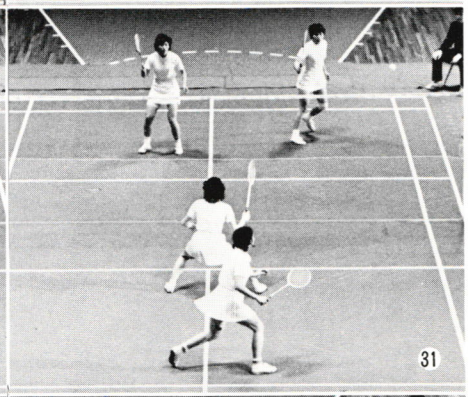


㉚、㉛竹中、バック・ハンドでレシーブ、手首で押し出すように、サイド・ライン添いにドライブで返球。

㉜湯木、こんどは一歩踏み込んで、やゝ態勢の立ち遅くれた竹中をめがけてボディ・アタック。

㉝竹中、上体をねじるようにして、オーバー・ヘッド・ストローク、頭上でシャトルをとらえ





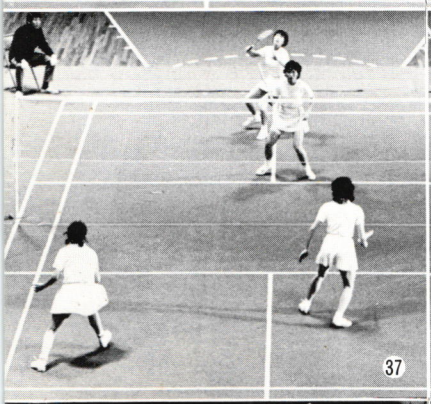
再度、湯木をめがけてショート・ラリーの応酬。

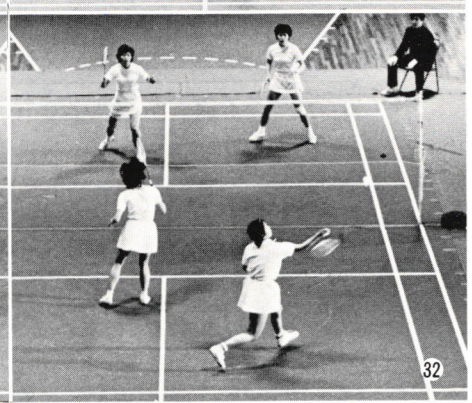
㉞湯木、こんどはラケット面をうまく返して、シャトルをかわし、ネットへ落す。

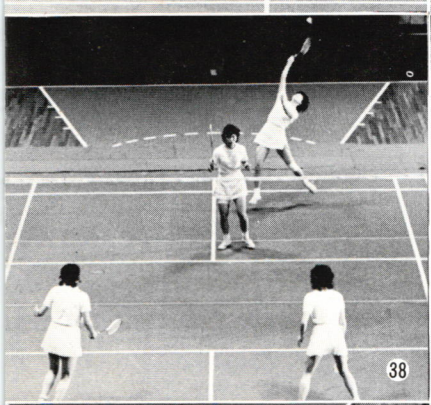
㉟、㊱中山組が片方へやや重なったのをみた相沢は、バック・サイド・コーナーを狙い、ドライブで鋭くつく。

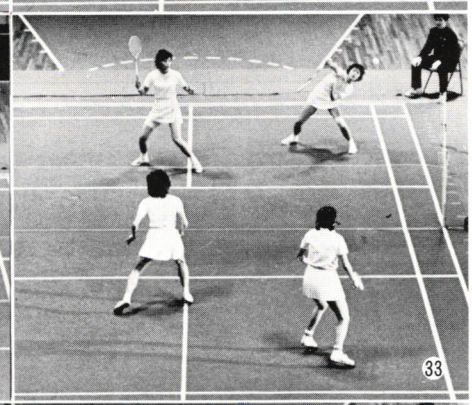
㊲、㊳湯木、バック・ハンドから大きく打ち返しのがれる。

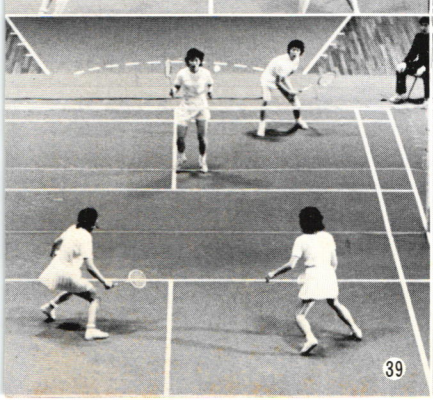
㊴打ちあがった返球を待ち構えて竹中、豪快にスマッシュ！

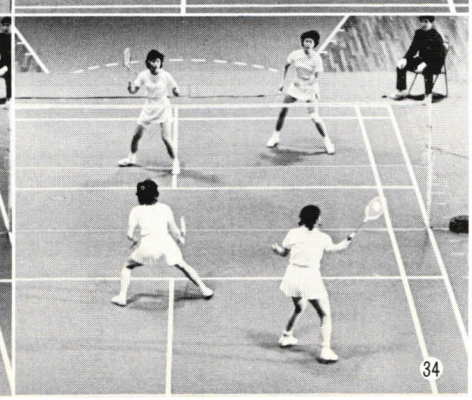


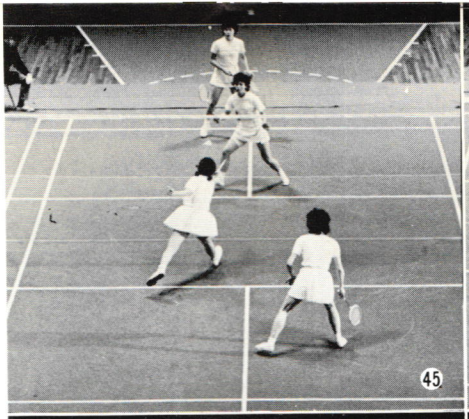


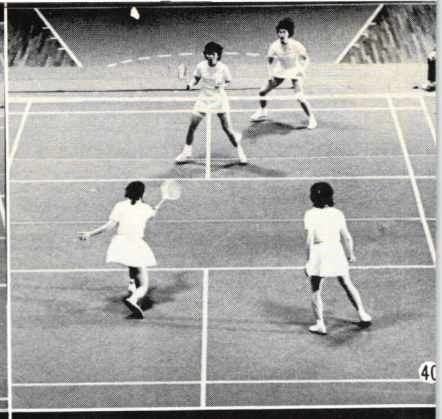


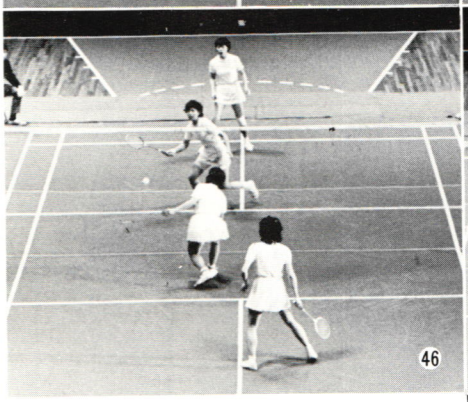


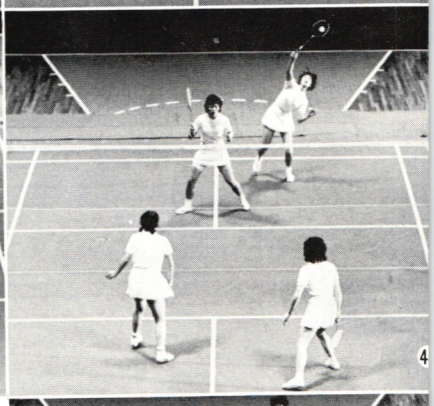


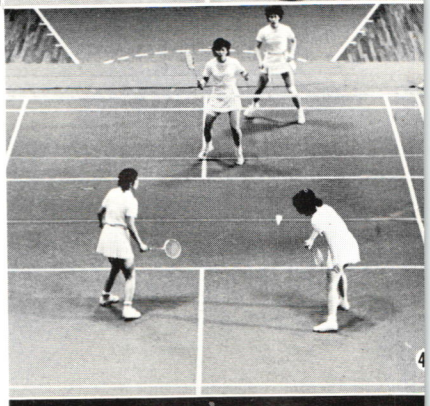


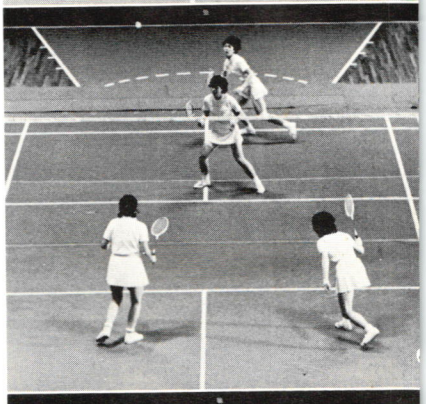


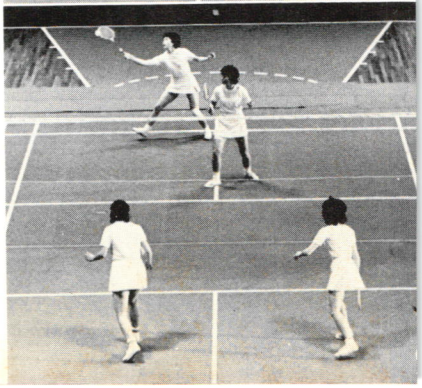












⑩湯木、踏み込んで、フォア・ハンドでレシーブ。

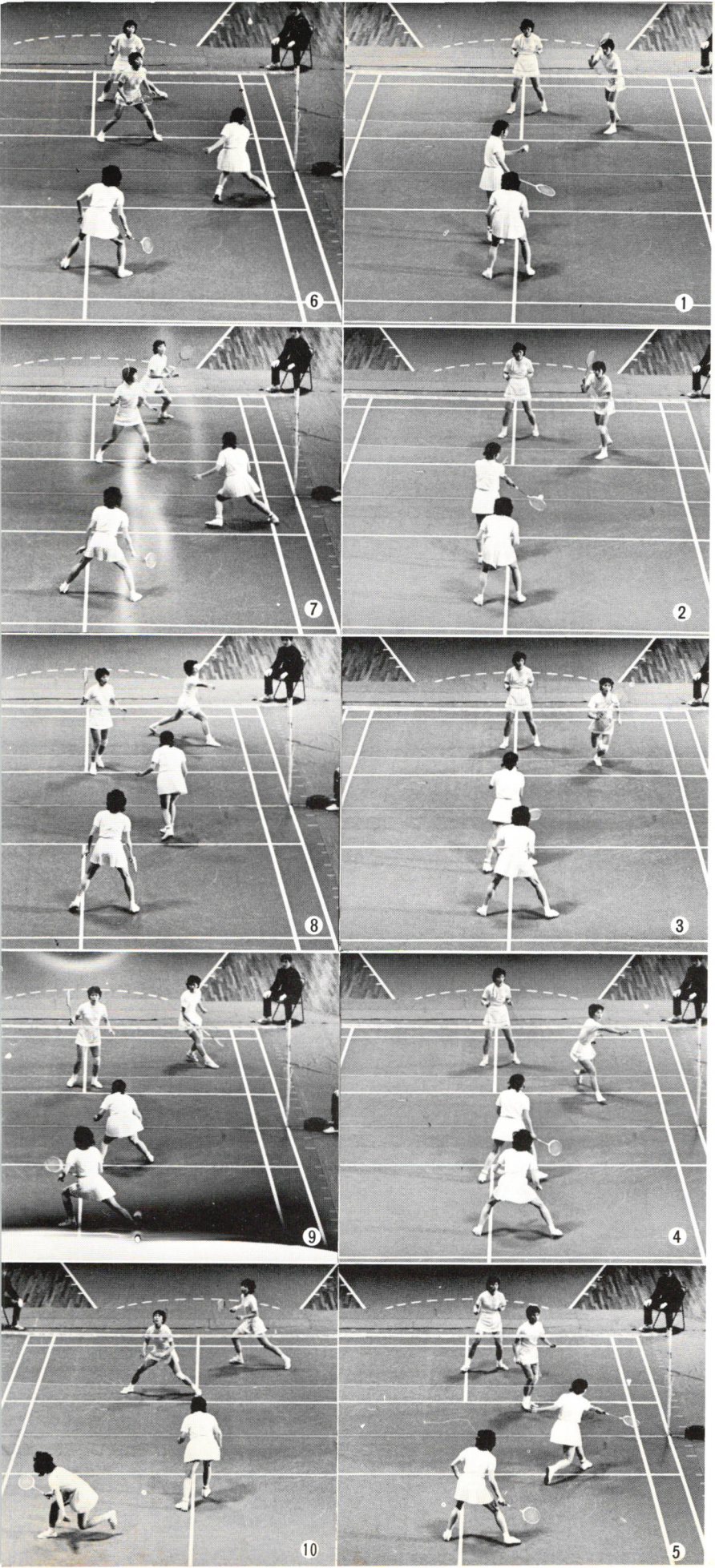
⑪再度、打ちあがった返球を竹中、こんどはカットでネットへ落すが、タマ足がのびる。

⑫、⑬中山、難なくこれをレシーブ、慎重に相手のバック・コートへ打ち返す。

（このあたりでは、攻撃の先手は常に相沢組が仕掛けている）

⑭竹中、もう一度カットでネットへ落す。

⑮、⑯湯木、飛びこんでクロス・ネットで決めようとするが、惜しくもミス。



（その２）

①サーバー湯木、レシーバー竹中。

②、③湯木、ショート・サービス、サイドを狙う。

④竹中、一歩踏み込み、バック・ハンドでレシーブ、ヘアピンでネットへ置く。

⑤、⑥湯木はこのショットを拾い、サイド・ラインに添って中間球で打ちあげる。

⑦、⑧、⑨相沢、バック・ハンド・ショットでクロス・コートして逆に中山組のバック・サイドを攻める。

⑩中山、バックハンドで辛くもこれをレシーブするが、フライトは絶好球となり相手コートへ

⑪相沢、慎重に待ち構えスマッシュ態勢、中山組はサイド・バイ・サイドでこれに備える。

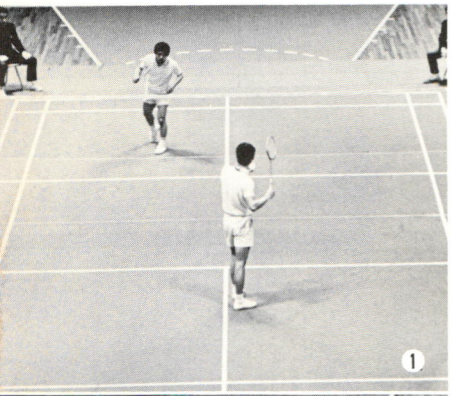
⑫相沢の強烈なスマッシュは湯木のボディーを目がけ打ち込まれる。

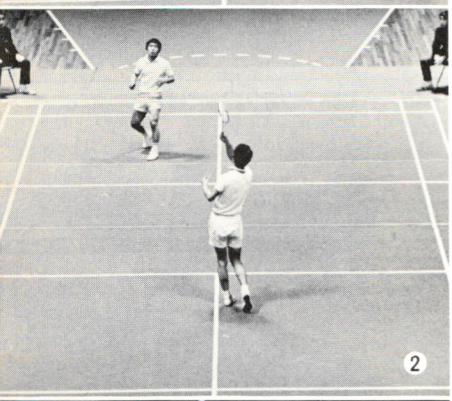
⑬、⑭、⑮ベルトあたり、理想的なボディ・スマッシュに湯木はさばききれず、ミス。

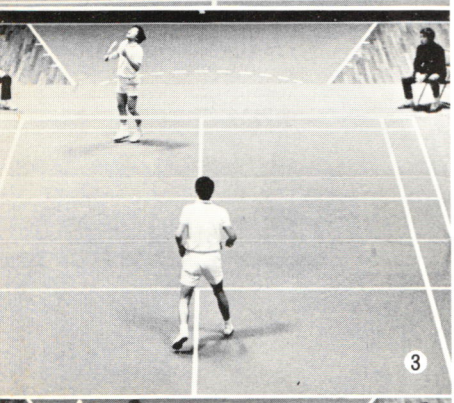
昭和46年度

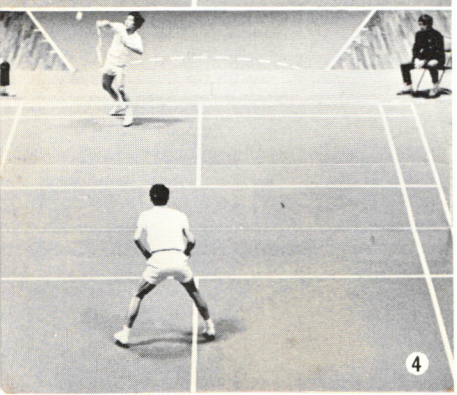
全日本総合選手権大会
《男子シングル決勝》

梅野尾 —— 小島

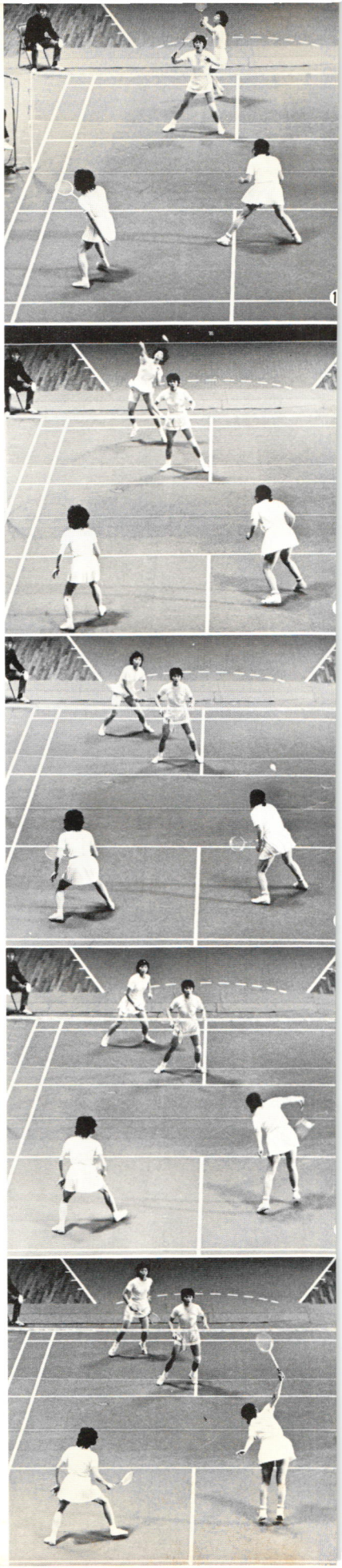


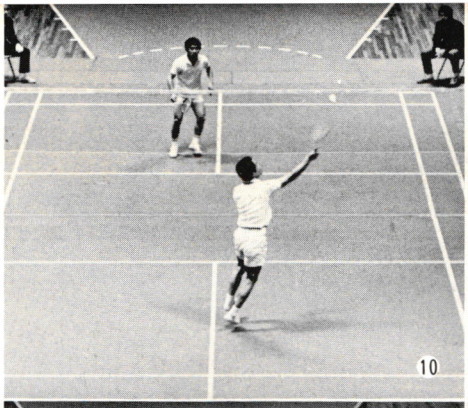


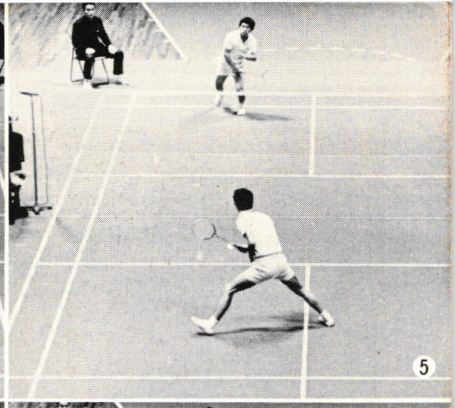




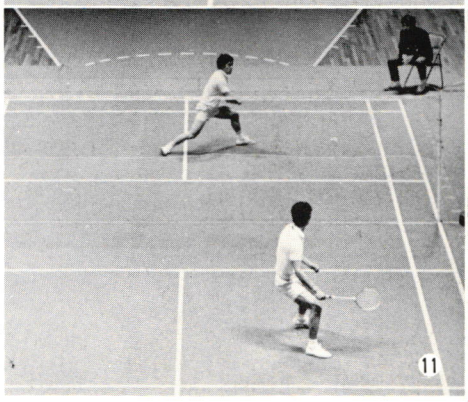
①、②サーバー、梅野尾、レシーバー、小島、梅野尾ロング・ハイ・サービスを打ち上げる。
③小島、ステップ・バックし、フライトの落下を待つ。梅野尾はコート中央のホーム・ポジションでレシーブ態勢、
④、⑤、小島、ドライブでラインに添ってストレートに返す。



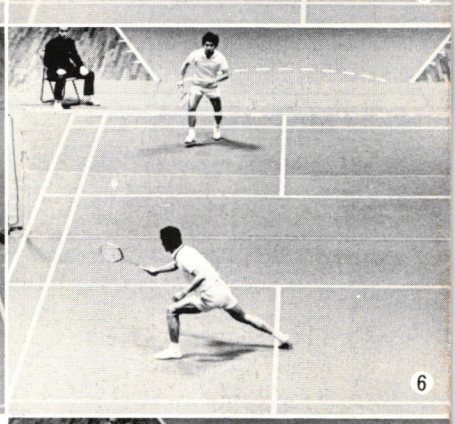




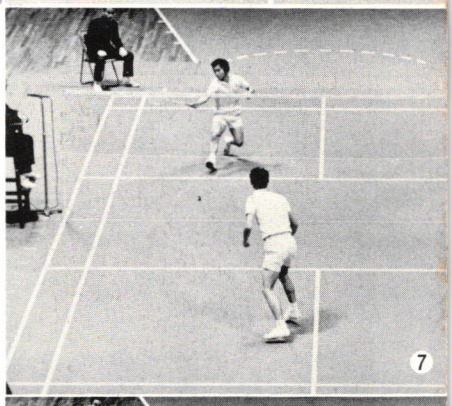
⑥、栂野尾、一歩踏み込み、バック・ハンドでレシーブ、ネットへ返し、ヘアピンに誘う。



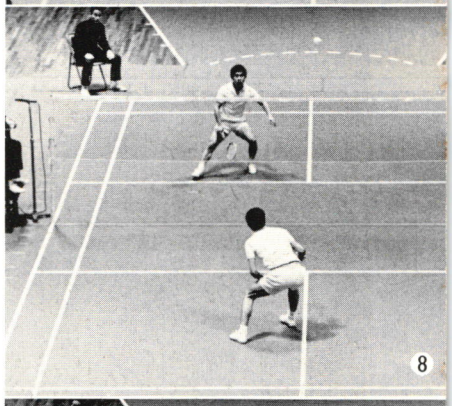
⑦小島これを察知し出足よくネットへ。



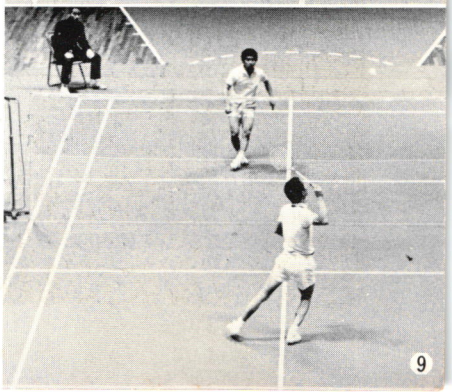
⑧小島、独特なフェイント気味のモーションから、クロス・コートで栂野尾のフォア・バックをつく。

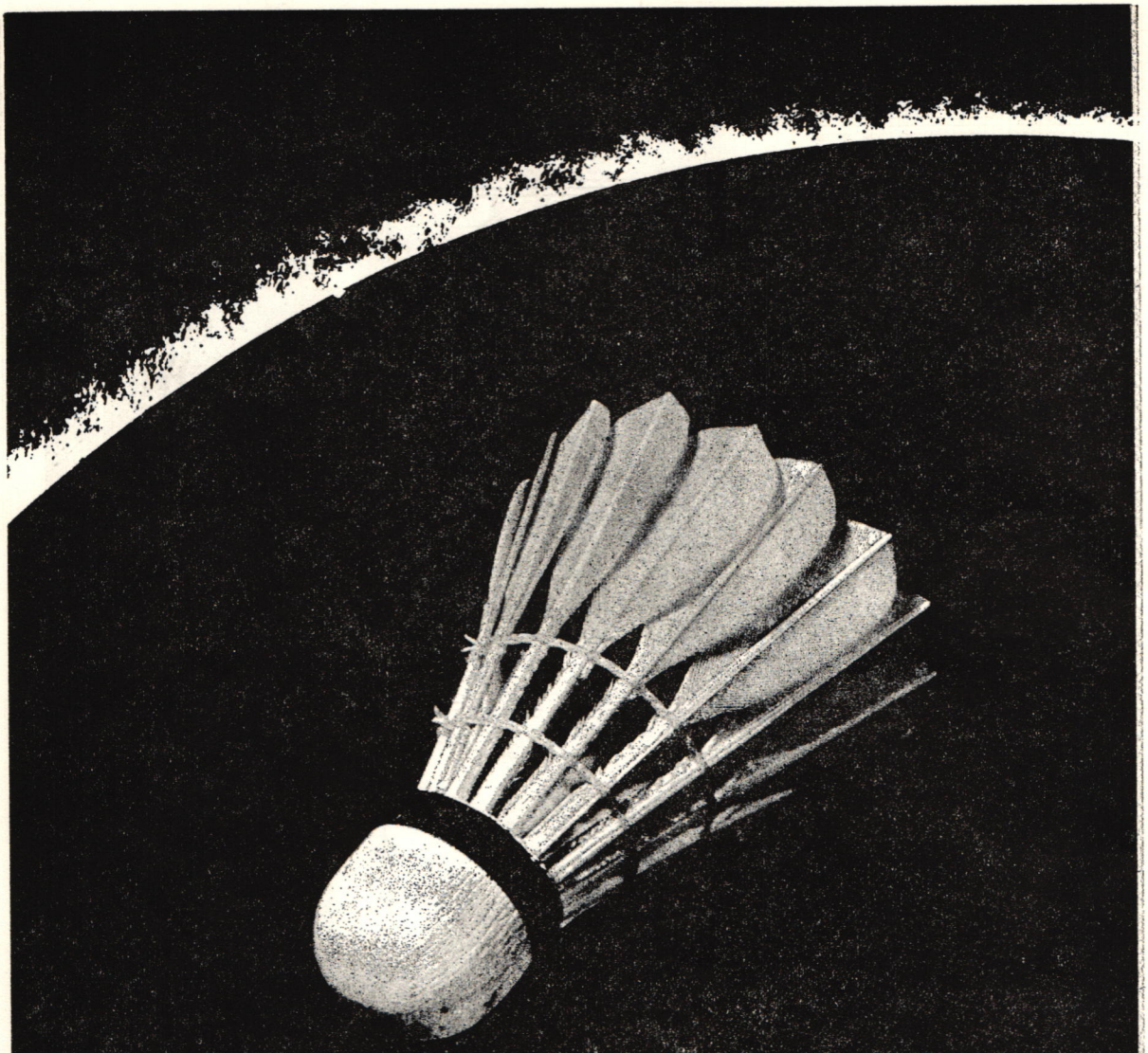


⑨、多少、浅い返球であったため栂野尾、難なく追いつき⑩軽く処理しようと、ネットへドロップを放つが。



⑪軽卒なミスでネットへひっかけてしまう。





新しい現代に生きるあなたの
「心」を捉えて離さない
――――サンバタキング――――

サンバタ

ユーバー杯

栄光と努力のあとを ふりかえって

日本の初出場まで

―隆盛ほこった米英勢―

中山紀子
天野博江



いよいよ、ユ杯二度目の防衛（三連勝）への時期が近ずいた。いまでこそ、日本の女子は世界に冠たる存在だが、ほんの十年前までは、海外に出たこともなければ、だから伝統をほこる欧米に、名も知られていなかった。

一九六六年、日本がこの大会に初めて出場、いきなり王座をつかんだときは、白人さん、さぞびっくりしたことだろう。

もちろん、日本も、なんとなく強くなったわけではない。どんな努力が払われたのか、いまの若い愛好者にとって、それを知ることは、今後のために、かけがえないプラスだろう。

そこで前大会の中山（高木）天野両ベテランが四六年八月の東海女短大紀要にのせた回顧と反省を、ここに再録してみた。

① はじめに

今日、日本には数多へのスポーツが普及し世界でも指折りのスポーツ先進国であるが、その中でも女子が世界選手権を持っているのは、卓球とバドミントンとソフトボールだけである。

とりわけ歴史の浅いバドシントンが世界制覇をするまでには〝ローマは一日にして成らず〟ごとく色々の困難があったことはいうまでもない。

幸運にも第4回、第5回と連続メンバーとして参加した経験をもとにしてどのような経過を経て世界制覇がなされたかを綴ってみることにしたい。

② 世界女子選手権大会（ユーバー杯）とは

一九三六年から行なわれていた男子の世界選手権大会（トマス杯）に準じて、一九五六年にかつての全英大会の女子シングルスで優勝したことのある名プレヤー Mrs. Uber が地球儀を型どった銀製のトロフィーを寄贈したことから始まった。

第1回は一九五六年に行なわれ、以後、3年ごとに一回開かれ、現在で5回を数えている。

試合形式は、テニスのデビスカップのように、世界を四つのゾーン（アジア、アメリカ、ヨーロッパとオーストラレーシアに分けるが、どこのゾーンに出場してもよい）に分けて予選を行ない、そのゾーン優勝国とチャンピオン国が一カ所に集まってインターゾーン決勝を行なう。なお団体戦の内容は計7試合を行ない（シングルス3試合ダブルスは4試合＝2つのペアがリーグ4点先取である。これはあくまでも国同士の対戦なので個人戦はない。

注（個人戦の世界選手権はないが、それに匹敵するものとして現在、歴史のもっとも古い全英大会が暗黙の中に考えられている。）

③ 第1回―第3回大会

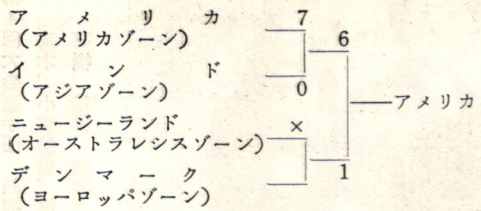
第1回～第3回までは、日本の女子はレベルが低いということで参加しなかったので、詳しいことはわからないが、後記に示すとおり、アメリカの全盛時代であったようだ。

特にアメリカのジュディ姉妹

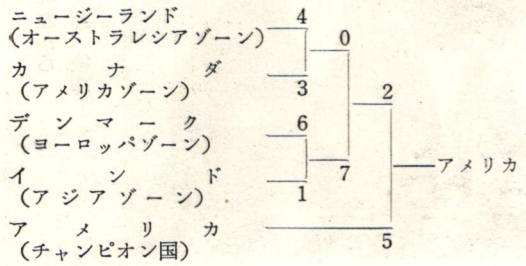
（妹は全英大会において過去10年間シングルスに優勝）が、3回にわたり活躍していたようである。それに当時は、男子は圧倒的にアジアが強かったが、女子は欧米に比べ、はるかに技術的に劣っていたようで、アジアの強国インドネシアでさえ、チャレンジャーになることが出来なかった。

なおこれは余談であるが、私達は偶然の機会から第1回大会が行なわれたイギリスのブラックプールで試合をする光栄を得た。それは私達の体育館のイメージとはほど遠いもので、さながらシャンデリアが輝く王宮の広間であった。

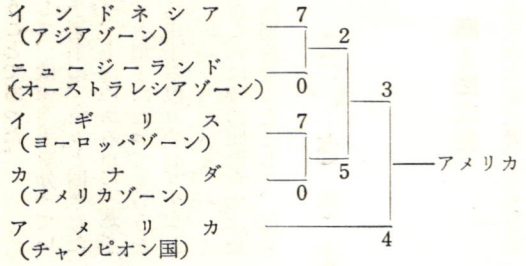
第1回（1956～57）於イギリス



第2回（1956～60）於アメリカ



第3回（1962～63）於アメリカ



こんなところにも、なにかしらバドミントンが優雅なスポーツ、特にイギリスの貴族に中心にして発展したという裏付けを感じさせられた。

④ 日本初参加まで

日本が第4回の世界大会に参加することが決定したのは一九六四年であった。

それまでは女子の国際試合としては第4回アジア大会（ジャカルタ）だけであったが、内外の情勢を考えて、女子も男子に続いて、世界のひのき舞台に参加させてもよいだろうとの見解に達したのである。

その年の秋（一九六四年）十月に、さっそく第1回の候補選手12名が全国から選ばれ神奈川県の久里浜に集められた。

当初協会の役員はじめ、私達選手自身も、世界選手権といっても経験がないだけに、なにかしら縁遠い存在という感じしかなく、選手達はただ他人に負けたくないという気持の強いだけの合宿であった。

ちょうど東京オリンピック大会が開かれていたので、日紡の魔女ぶりをまざまざとテレビで見せつけられたと思い出がある。

翌年三月に第二回合宿が開かれ、あるものは脱落し、又新メンバーも加わった。その頃、協会の常務理事の小宮淳宏氏が監督に決定し、少しずつチーム編成が整っていった。

64年10月、初合宿へ〝魔女〟の活躍も刺激

4月に高木と横山選手が東南アジア遠征に出かけ、インドネシア、タイ、マレーシア、香港を廻って来たことは選手達は大きな刺激を与え、国際試合をより身近かに考えさせるようになった。

その後、逗子、小田原などで合宿を重ね、福井コーチも誕生した。なおその頃すでに過去の実績などによって選手は次のように内定していた。（高木、横山、横井、天野、高橋、後藤、高塚）

その間、監督は選手が全国からの寄せ集めであるので①ともするとバラバラになりやすいチーム統一させていくこと②しかしバドミントンはあくまでも他のスポーツ、バレーボールやバスケットボールのようなチームゲームとは違う個人競技なので③一人一人の個性はあくまでも尊重することに日夜努力を傾けてくれた。

監督自身も権力で選手を卒いていくのではなく人間性に魅かれて選手が監督を慕っていくという最善の方法をとってくれた結果、私達には二度と経験できないであろうと思われる素晴しいチームが出来上がった。

白人コンプレックスを消そう

なお、チームとしての大きな問題点は、次のようなことであった。

①国際試合の経験が少ない者を、どうやってアガらないで試合ができるようにさせるか（特にそれまでに日本の女子が相手とした外国選手は全てアジア人であったので見知らぬ欧米人に対する恐れがあった。）

②技術的には試合数の多いダブルス強化に重点をおくこと。長身の外人に対する戦法を身につけさせること。

③外国ではほとんど夜試合が行なわれるので、それに合わせてコンディションの調整をすること。（食生活もパン中心）

以上3点に対し監督は常に訓示をした。〝初参加だから外人に教わるなどという考えはだめだ。どんな相手でもたたきのめそう、という気持でやるのだ〟



第4回大会選手団　前列左から
高木、小宮監督、横山、後列左から
高橋、横井、福井コーチ、天野、後藤

ということであった。

そして、欧米選手を知っている男子選手に、色々と聞きただしたり、上背のある男子選手に、試合相手になってもらうなどして出来る限りの対策をした。

またこれは特に問題点ではないが画期的なこととして、従来の服装のショートパンツから、より動きやすいと思われるスコートに変えるべく努力がなされた。

これは、ともすると服装などの点で外国選手にコンプレックスを抱いては損だからという、精神的な意義も考えたからだ。

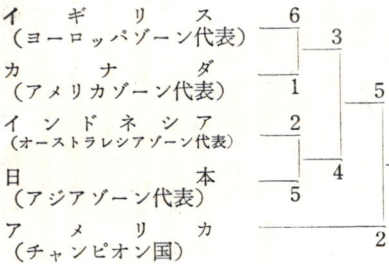
そうこうしているうちに、いよいよ目標が近づいた。なお途中高塚選手のアキレス腱切断という、チームに思いがけぬ手痛いショックをもたらしたが、残されたメンバーでたたきのめそうという合い言葉でより強く団結して来るべき日を迎える万全の準備をした。

さいさきよしアジア予選に快勝
得た海外での経験

⑤ 第4回大会

翌一九六六年二月、とうとうアジア・ゾーン予選会がインドのハイデラバッドで行なわれることになった。

第4回大会（1965～66）於ニュージーランド



タイ対インドの勝者と対戦するので技術的には、はるかに日本が有利とされていたが、日本の真冬から真夏の暑さの中に飛び込んで行ったため、思いがけぬアクシデントが起り関係者をあわてさせた。

それは六人中の二人が風土病にかかり、40度近い熱のためほとんど食事もとれず、まいってしまったことだ。しかし、幸い試合前日に起き上ることができたので、恐る恐る試合に臨んだところ、結果は心配をよそに7－0に終った。

これによってアジアの代表としてニュージーランド大会に出場する権利を得たのである。なおここで私達は大きな教訓を一

第4回大会

日本5－2インドネシア			
高木	2－0	ミナルニ	
横山	2－0	コリー	
横井	2－1	レトノ	
高木・後藤	0－2	ミナルニ・レトノ	
天野・高橋	2－0	コリー・イダワチ	
高木・後藤	2－0	コリー・イダワチ	
天野・高橋	0－2	ミナルニ・レトノ	

（対インドネシア戦，5月14日於ナピア）

つ得た。それは海外遠征の場合は、常にアクシデントも計算に入れてなお、勝つ自信がなければいけないということである。

一九六六年五月、いよいよ本番である。選手団は次のとおりであった。

監督（小宮淳宏）**コーチ**（福井正康）**選手**（高木紀子、横山満子、横井文子、天野博江、高橋とも子、後藤和子）

羽田を出発する時は監督、コーチはじめ、選手のだれひとりとして経験がないだけに、まさか優勝するとは思わなかったであろう。正直いって選手の私達自身も、対インドネシア戦だけはどうしても勝たなければいけない、という気持であったように思う。

インドネシア、英国も連破

インターゾーン　驚いた深夜の熱戦

対インドネシア戦（5月14日）

於ナピア　ニュージーランドは、ちょうど晩秋であった。経費節約のためホテル住いをやめ、モーテルで自炊して大会に臨んだ。

開会式にユーバー杯が飾られたが、選手自身にはその杯が何かはるかに遠い存在の物であるような印象をうけ、自分達が日本に持ち帰ることができるなどと夢にも思わなかった。



開会式にて初めてユーバー杯にさわる

試合はインドネシアの執念ともいうべき必死の戦いにもかかわらず、日本はシングルス3勝ダブルス2勝で5対2というスコアで勝ち進んだ。

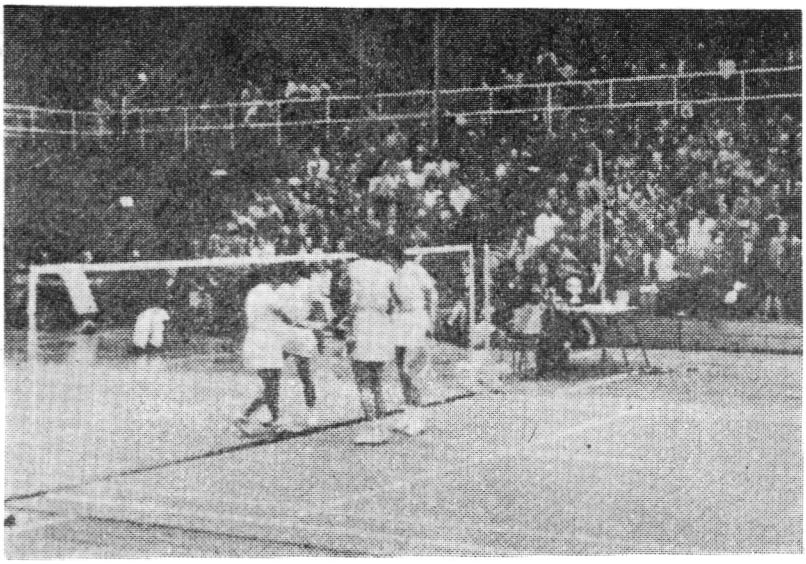
その夜、試合のはじまったのが午後8時頃。終了したのが夜中の1時30分頃だったのは本当に驚かされた。（夜間行なう理由はいろいろとあるだろうが、主に観客のためを思ってのことであろう。）

その上、初めてフーバー・コート（従来の床にコートをかくのではなく、床にプラスティックのコートを敷くというやり方）を使用したので、そのマットの感触になれるまでにちょっと手間どったように記憶する。

だがこのマットは非常に便利なので、その後の国際試合に、ほとんど用いられるようになった。

インターゾーン決勝（5月18日）於オークランド　会場がナピアからオークランドに移った。対戦相手はカナダを6－1で破ったイギリス・チームである。当時のイギリスは選手が揃っていて、チャンピオン国のアメリカよりも強いだろうとうわさされていたのである。

初めて対戦する相手に対しては基本を忠実に行なう以外はない。それに、上背の違いに〝驚ろかされていたのでは始まらない〟と自分達にいい聞かせながら対戦したところ、シングルスは簡単に三人とも勝ってしまった。



上背のあるイギリス選手（向って右側）

ダブルスの〝高いカベ〟　監督も胸ドキドキ

この分ならダブルスも、と多少の自信と安心感を抱いたところさあ大変。ダブルスが全然勝てないのだ。

178センチぐらいの選手が二人、コートに入ってしまうと

カベのような感じで我々を威圧してくるのだ。必死に打ち込んでもはね返ってくるので、しまいにはどこに打てばよいのか解らなくなってしまった。

控室で監督はじめ選手権は、なんとか1勝をしなければ、むざむざとチャレンジャーになるチャンスを失なうのだと思うと、いても立ってもいられない気持になってきた。そんな気持を神様が可哀想に思ってくれたのだろうか。ようやく一勝できチャレンジラウンド進出が決まった。

なおここで特筆すべきことがある。

子供が勝った　地元紙の大見出し

バドミントンの試合においては、選手個人の力を充分発揮させるために、外部からの助言、いわゆる、サイドコーチは一切禁止されている。

しかし、日本においては団体戦の場合などは、ベンチをコートサイドに置く習慣になっているが、ここでは席が設けられていなかった。

そのため試合中どんなに追い込まれて思案にくれても、監督などの助言を受けることが出来ず、選手達が自分自身で解決方法をみつけなければいけなかったので、なれない日本選手にとっては相当こたえたのである。

観衆は驚ろいた。子供のような小さな体でコートを走り廻りしかも、初参加というハンディキャップを克服して、イギリス・チームに勝ったのだから。現地の翌日の新聞は私達選手が恥かしくなるほどの賞賛ぶりであった。

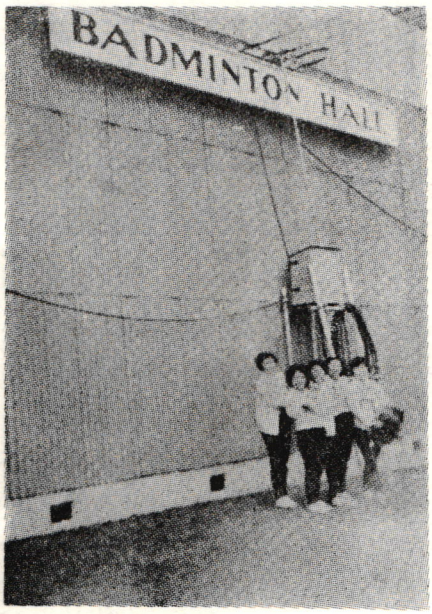
ついに〝世界一〟の座へ
始った新しい歴史のページ

チャレンジラウンド（5月21日）於ウエリントン　アメリカの連勝なるか否か？　という興味深い試合であったが、ほとんどの人々はアメリカの力を信じていたことは間違いない。

日本人などに負けてたまるかというアメリカ選手に対して、負けてもともとという日本選手であった。

シングルスのトップはバドミントンの女王として君臨してきたジュディ・ハッシュマン、どの新聞にも高木選手が勝つとは予想もしていなかった。

それがかえって大和なでしこを発奮させ、勝利の女神を日本に微笑させてしまったのだ。閉会式で、ずっしりと重いユーバー杯を渡された時は、信じられないような気持であった。



思い出のホール前で選手たち

ついに一九六六年五月、世界のバドミントンの歴史は変った。男子に引き続き、女子もアジアが世界を制覇するようになったのである。これに至るまでの過程には数々の苦労があった。

しかし、ここでいちいち数えあげていてもきりがないので割愛する。まず第一に選手を育ててくれた関係者達の努力が結ばれたというべきであろう。

⑥ 第5回目指しての強化

日本がユーバー杯を獲得した時点ですでに第五回大会への強化が始まったとしても過言ではなかろう。第4回大会がラッキーであったと見る人々に対しても、第5回では自国で堂々と防衛しなければならないと思うと、喜びだけにのんびりと浸っ

第4回大会
チャレンジ・ラウンド
5月21日（ウエリントン）

日	本	5—2	アメリカ
高	木	2—0	ジュディ
横	山	2—0	バリナガ
横	井	2—0	ジェンセン
高後	木藤	0—2	ジュディ ジェモ
天高	野橋	2—1	バリナガン ジェンセン
高後	木藤	2—1	バリナガン ジェンセン
天高	野橋	0—2	ジュディ ジェモ

第4回大会
インターゾーン決勝
5月18日（オークランド）

日	本4	—	3	イギリス
高	木	2—0		ベアストウ
横	山	2—0		ホートン
横	井	2—0		スミス
高後	木藤	0—2		バラドン ホート
天高	野橋	0—2		ベアストウス ロジャー
高後	木藤	2—0		ベアストウス ロジャー
天高	野橋	0—2		バラドン ホート

初防衛の感激

ユーバー杯はふたたび高木主将の手に。一万余の観衆と史上初のマスコミ攻勢の中でバドミントンはスポットをあびた



ていることは許されなかった。

監督や選手達は帰国の途上でさえ三年後の大会についてしばしば話し合った。第4回の経験者が同じように出場することが理想だろうが、女性の年齢の社会的制約から無理だと思われる。それにはどのように対処すればよいのだろうか?

あれこれと想像しても、先のことは皆目、見当がつきかねる。神のみが知るかぎりであろう。結論としては次のように考える以外なかった。

早くも次回の対策を練る

日本でバドミントンをやっている全てのメンバーが、自分達が出て戦ってユーバー杯を防衛するのだという気持で努力し、三年後の大会時点で、最も強い選手が出ればよいのだ、ということであった。

その後一九六六年十二月、第五回アジア大会がタイのバンコックで開かれた。チャンピオン国としての貫録を示さなければという気持が強いだけに選手四人(高木紀子、天野博江、高橋とも子、後藤和子)は今迄にない精神的な苦しさの中で試合に臨んだ結果、団体、単(高木)優勝、複2・3位を取ることが出来、どうやら面目を保つことができた。

翌一九六七年三月、高木、天野選手が日本女子で初めて全英大会に参加した。チャンピオン国の強さを世界中に披露するために、伝統あるヨーロッパに乗り込んだわけだが、成績はかんばしくなく単(高木)2位、複ベスト8であった。

油断大敵を痛感

これによって、日本もまだまだ油断ができないと関係者達は痛感させられた。その後、今迄になくひんぱんに海外遠征が続き、各地で日本の女子の強さを発揮した。

一九六七年十二月、いよいよ第五回ユーバー杯の準備が具体的になり、十二名の候補選手により、強化合宿が代々木オリンピック青少年スポーツセンターで開かれた。全体的に年齢も若返り、一部の者を除いては二年後という気安さからのんびりとしたムードであった。

68年12月、選手団決まる

一九六八年五月、正式に監督今井先氏、コーチ毛利清志氏、マネージャーに山本洋彦氏が決定し防衛戦対策も軌道に乗り始めた。

その後、山形や東京で合宿を重ねたが、その間コンディションの調整に失敗した者達が、一人抜け二人抜けしていった。一九六八年十二月、最終的に候補選手九名が決定し、長崎合宿を迎えた。

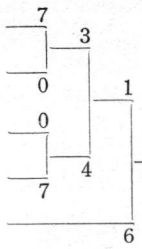
日本中の多くの人々が、おぞうにを食べて骨休みをしている時に、選手達は温度が五度より上らない寒い体育館内をかけずり廻った。除夜の鐘を聞きながら監督、コーチ、主将は額を集めて来る六月に対しての対策を練った。九名の中のだれが出ても勝たなければいけない。特に第四回がダブルスで苦戦したので、どうしてもダブルスを強化しなければいけない。

週末の上京練習にも成果

なお、二カ月に一回位の強化合宿ではなかなか技術の向上を望めないので、選手達の地方における毎日の練習に重点を置き、それぞれの欠点を直すべき課題をもたせ、より充実させようと試みた。また土・日曜日を利用し、互いに選手が上京し個々の強化練習に励んだ。

一九六九年三月、日本は全英選手権大会に四人の女子選手

第5回大会（東京）



（高木、天野、高橋、湯木）を送り込んだ。

その頃すでにゾーンの優勝国が決まり（アメリカ・ゾーン＝アメリカ、ヨーロッパ・ゾーン＝イギリス、アジア・ゾーン＝タイ、オーストラレーシア・ゾーン＝インドネシア）特に本命と思われるイギリスの力を見てくるためであったが、結果はシングルス1位（湯木）、2位（高橋、天野）、3位（湯木、高木）をとり、関係者は大いに希望を抱くことになった。

一九六九年五月、さわやかな緑が目にしみる頃、一カ月後に決戦を控えての最終合宿。実戦さながらの試合練習や、マスコミからの刺激に多少の不安を抱かせられながらのミーティング、話題の中心はいかにして試合当日に最高のコンディションに持っていくべきか？　ということであった。

身体的なものに関しては、地元であることと、それぞれ長い選手生活を経てきた者達だけにそれほど心配はないが、それよりもむしろ追われる立場という精神的な圧迫感を、どう克服するかという点であった。

それには試合に臨んでは当然のことながら、一球一球に全力をそそいで戦う以外はないというふうに、自分自分を納得させることであった。

決戦の日、いよいよ来たる

地元での防衛に血わき立つ

⑦ 第五回ユーバー杯 於東京

一九六九年六月八日。いよいよ開会式。それぞれのお国柄を表わしたブレザーで勢揃い、評判どおりイギリス、インドネシアが強そうだった。

高木主将から国際バドミントン協会長にユーバー杯が返還されたときは、再びそれが日本に戻ってくるだろうか？　という不安を関係者達はみんな抱いたことであろう。

なお、レセプションで顔を合わせたところ前回（四回）大会の出場経験メンバーはアメリカ二人、インドネシア二人、日本が四人で圧倒的だった。これをみると、外国も女子の世界は新陳代謝が激しいようである。

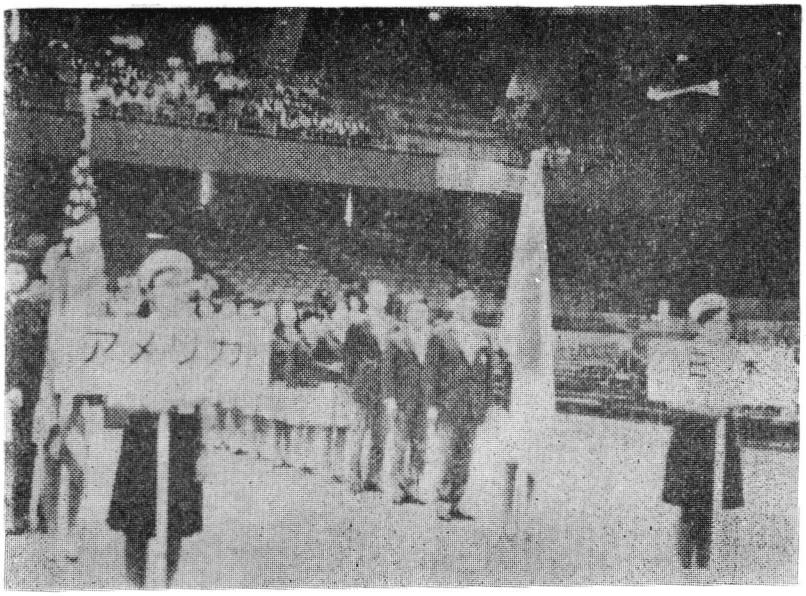
関係者達は再会を喜び合いながらも、月日のたつ早さに、いまさらながら驚いた。第一日のイギリス対タイ戦は、イギリスの7―0という圧倒的な勝利であった。

第二日、インドネシア対アメリカ戦は、アメリカの健闘を期待した試合であったが、ジュディ・ハッシュマンの抜けた穴は大きかったようで、インドネシアの7―0に終ってしまった。

インターゾーン決勝（インドネシア対イギリス戦）チャレンジ・ラウンド進出をかけて双方とも非常な意気込みでぶつかり合った。そして日本チームが見守るうちに4―3でインドネシアの勝利が決まった。



イギリスシングルスNo. 1ペリン選手



開会式

快進撃、王座守り抜く

史上初　一万余の大観衆も興奮

チャレンジラウンド（日本対インドネシア）インドネシアは本当にひどいことをした。なぜならば、国際バドミントン競技規定として、シングルスはランキング順に出さなければならない、とうたってあるのにもかかわらず（どの時点でのランキングか規定してないが）それを無視したのであった。

インドネシア規約を無視

対イギリス戦で示すように、ミナルニがNO1であることは、火をみるよりもあきらかなのに、それをNO2として出しているのだった。

国としての信用を失なうことがわかっていながら、あえてそうした理由は、国技として国をあげての試合であるため、どうしても勝ちたかったのであろう。そして練習はすべて日本の関係者をシャットアウトした秘密練習であった。

試合前日、選手達は最後の調整を行ったが、この時ほど私達にとって一球一球が大事であることを痛感させられたことはなかったであろう。生活時間も試合時間（午後四時）に合わせて、コンディションを整えた。

六月十四日、前日からの強い雨も私達を祝福するかのように晴れあがり、一万余人の見守る中で試合が開始された。試合に先立って関係者が一番心配したことは、過去の国際試合でのインドネシアの観衆のマナーの悪さであった。

なぜなら過去二回の男子世界選手権大会であまりのひどさに没収試合になったことがあるからだ。そのため、今回は事前に大使館を通じて警告をしておき、もし騒いだ場合は没収するとの処置をとっていた。

第1試合湯木―ミナルニ戦の予想は五分五分であった。実力では、はるかに湯木選手に分があるが、キャリアの差ということになると、ミナルニが上であった。

湯木、意外の敗退

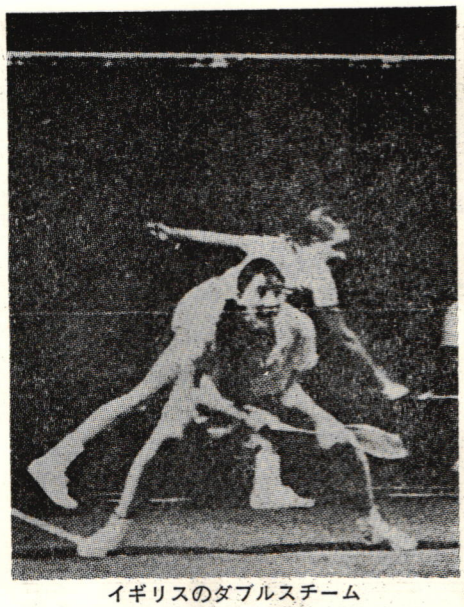
しかし、第一試合という重みや、ミナルニの計算しつくされたプレーに、湯木選手は実力の半分も出ないうちに、あっけなく負けてしまった。一瞬、日本側のベンチは動揺した。

しかし、引き続き、高木、高橋選手が実力を発揮してシングルスを2―1とリード、ダブルスにはいった。トップ・ダブルス同士の対戦、この試合がこのチャレンジ・ラウンドの勝敗を決すると思われるので双方とも非常に熱のこもったものだった。

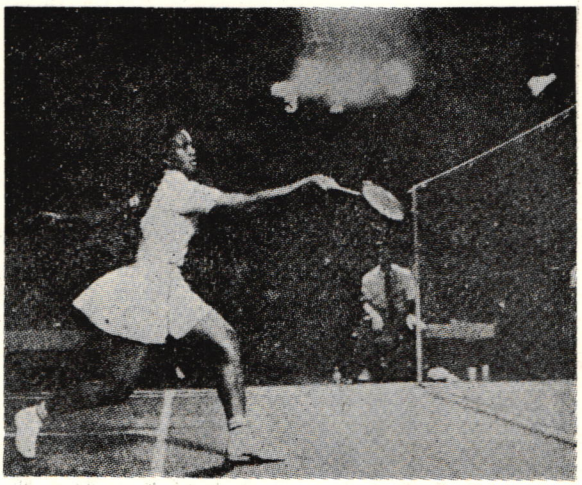
第1ゲームはインドネシアが取ったが、高木・湯木組は、絶対に勝てるのだと、互いに励まし合い、ともすると、観衆の期待が重くのしかかってくるのを払い、淡々と試合を進めた結果、第二ゲームをものにし、第三ゲームに持ち込んだ。

息づまるようなラリーの応酬の結果、ついに日本が勝った。これで3―1。日本はこれに気をよくし、引き続いてのダブルス（天野・高橋）組も全く相手を寄せつけずに勝ち日本の防衛が決定した。

選手達が喜こびを感ずるというより、いままでの肩の荷から解放されたため、しばらくはぼうっとしているようなありさま。人々からお目出度う！　と祝福の言葉をあびせられても、



イギリスのダブルスチーム
（ペリン・リカード組）



インドネシア　シングルス No. 1　ミナルニ選手

何だか夢のような気持で、再びユーバー杯を手にした時でさえ、信じられらいような心情であった。

なお現在、今回の勝因は何であったかと静かにふり返ってみて考えられることは、計画的に練習された成果であろうしまた全国のバドミントン愛好者達の熱心な支援の結果であろうと思われる。



第5回世界女子バドミントン選手権大会選手団
高橋・本間・高木・天野・湯木・竹中・浦口・相沢・後藤
今井・毛利・山本

日	本	6—1	インドネシア
S_1	高木	2—0	ポピー
S_2	湯木	0—2	ミナルニ
S_3	高橋	2—0	クルニアワン
D_1	高木・湯木	2—1	ミナルニ・ノナティ／ミレトナ・ハエテルエテ
D_2	天野・高橋	2—0	ヌヘ・ルスナティニ／ミレトナ・ハエテルエテ
D_3	天高・野橋	2—0	ミレトナ・ハエテルエテ／ヌヘ・ルスナティニ
D_4	高湯・木木	2—0	ヌヘ・ルスナティニ／ミレトナ・ハエテルエテ

三連勝への課題と反省
さらに必要な努力の数々

⑧ 日本の進むべき方向

ユーバーカップが国際バドミントン連盟会長から日本に渡された時、すでに、次回の防衛に対する戦いが始まったのである。それには特に、若手選手の養成が急務であることはいうまでもない。

その後、一九七〇年三月、女子選手五人が全英選手権大会に出場したところ、次代を背負うはずの湯木選手が、不幸にもアキレス腱を切ってしまい、日本の大きな損失であった。しかし、そのかわりともいうべき竹中選手が堂々と優勝し、何とか希望をつないだのである。

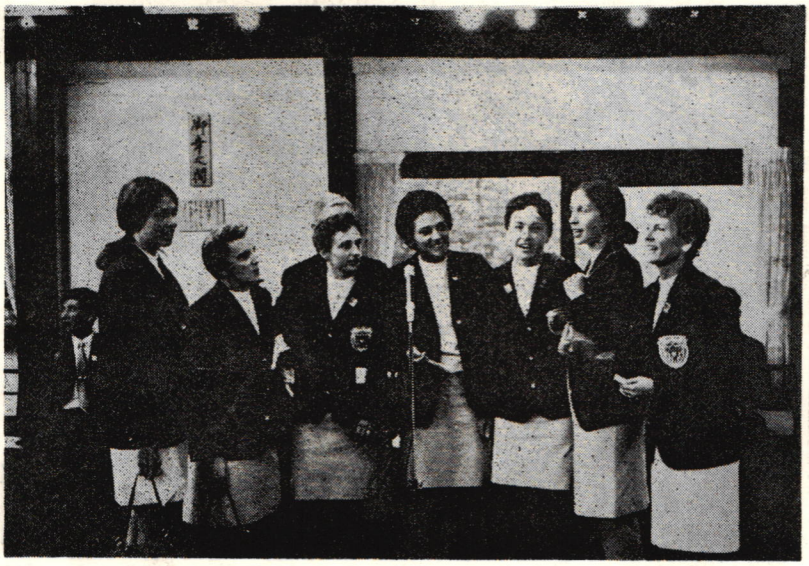
過去二回にわたり、チャンピオン国になったのは努力の結晶であったことは間違いないので、関係者達の日夜の努力がなされなければ、そう簡単には世界選手権は取れないと痛感する次第である。

が何としてもユーバー杯を他国に渡したくないものである。なお結論として次のような点、すなわち生理的心理的技術が問題になってくるであろう。初めに生理面について述べると、第一に試合は従来日本では昼間行なわれるという習慣であるが、国際試合はほとんど夜に行なわれるので、夜間に最高のコンディションを出すことが出来るように日頃から訓練しなければいけない。その代り朝はどんなに周囲がやかましくても必要な睡眠時間だけはとれるようにしなければいけない。

第二に、特に海外へ行った場合、食生活が一番問題になるが私達としては現地の食物を嫌わずに食べることが先決であると思う。なぜならば現地の食物はその土地の気候、風土にあったものが自然に生まれてきているのであるから、それが一番ふさ

わしいのである。

たとえば暑い国へ行った場合日本のような淡白な食事では、とうてい身体がもたないのは、多くの人が知るところであろう。また、その反面、ヨーロッパなどでは新鮮な生野菜の料理が少ないので、自分達でマーケットから野菜を買い込んで、食卓を飾るぐらいのくふうも必要であろう。第三に、海外に遠征し現地に到着してから、本番の試合まで、どれくらいの期間が一番適当だろうかということである。



これは試合内容や選手によっても多少の差はあるであろうが、大体三日から一週間ぐらいのところに本番がくるようにするのが一番適当と思われる。

なぜならば、身体がその土地にあうようになるまでに三日ぐらいかかるであろうし、また反対に余り長いと、単調な生活が続きやすいので、かえって志気喪失を招くことになりやすいからだ。

ゆるがぬ〝気力〟がカギ

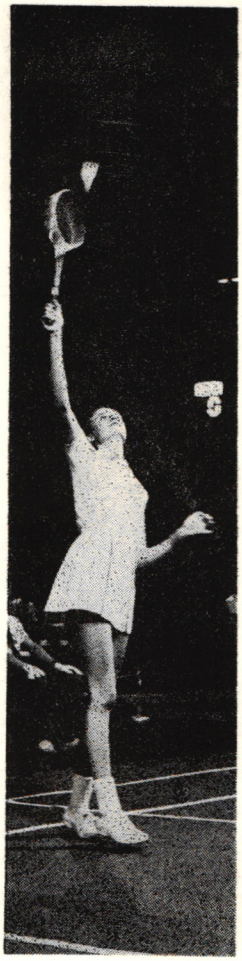
次に精神面について述べると第一に、会場がどんなにやりにくくても、また観衆にどんな野次をとばされたり、ひどい時には、相手国に有利な審判の判定がなされても、笑って対抗できる精神的ゆとりを持たなければいけない。

それには、従来の日本選手に多くみられる〝過保護的〟選手では絶対にダメで、コートに入ったならば、最後まで自分一人で戦うのだという考えを普段から習慣づけておく必要がある。

第二に、少なくとも国際試合に出る選手は、英会話を徹底的にマスターする必要がある。審判上のトラブルなどで、話しが出来なくて不利になることが、しばしば見受けられるし、またスポーツを通しての国際親善を思うと、話が出来ないのではどうにもならないからである。

最後に技術面をみると、第一に、身長の差がより大きくあらわれるダブルスの研究がまだまだ遅れていると思われる。

日本においてシングルスの世界一は育っても、ダブルスの世界一が中々育たないことからもわかるとおり…対策としては、規則上、どうしても防御体勢よりはじまるサービス（腰の線より下で打たなければいけない）から、いかにして相手の攻撃をやわらげるかという研究と、前衛のリーチ範囲をいままでの倍以上に広げるような練習をしなければならないと思われる。



第二に、身長の差は現実にどうしようもないのであるから、外人が一歩で届くところなら、日本人は二歩、走らなければならない。だから、それに必要な体力、特に持久力を養なうことが必要である。

第三に、比較的、日本人に得意な敏捷性（反応時間を短かくする）をさらにのばすようなトレーニングを積み、また逆に、外人の反応を遅くさせるような手段としてのフェイント。モーションをさらにくふうして身につけさせる必要がある。

最後に、体力をカバーする為には、バックハンドを徹底的にマスターしなければならない。フォアに劣らぬスピードはもちろんであるが、まず第一に絶対的な正確さを要求したい。

《表紙》
ユ杯候補チーム



特集の内容に合わせて、ユ杯チームを登場させた。撮影したのは横浜での第二次合宿のおり。何人かの、練習要員として参加している人々にも、いっしょに加わってもらった。

なにげない、集合写真だが、その中にも一人一人の個性らしきものがにじみ出ていておもしろい。

さて、選手についてはいまさら改めて紹介するまでもないほど、皆さんにおなじみだ。「先生」（教職を離れ、主婦兼サラリーマンとなったいまも）と呼ばれる中山夫人を先頭に、みんなが、たくましく戦ってくれることを祈ろう。

みんな笑顔でいるが、この笑顔を一生、持ちつづけるような人であってほしい。代表になるかどうか、勝つか負けるか、もちろん大事だが、試合は一時、人生は長い。

全日本入場収入の一部寄贈

日本協会、沖縄の仲間への援助運動で

巻頭の「御礼」でお知らせしたとおり、沖縄の仲間に手を差しのべる運動は、一年間をもって、一応、区切りをつけることになりました。

ご協力下さった方々の氏名はそのつど、本誌に掲載、お礼を申し上げてまいりましたが、その最後を飾り、もう一度〝善意〟のお知らせがあります。

日本バドミントン協会は、さる四十六年度全日本総合選手権のおり、この本誌のキャンペーンに賛同、当日売り一般入場券に、五十円分沖縄援助基金を折り込みました。この趣旨は入場券にも刷り込まれました。

その結果、予想を上回り、**四万七千七百五十円が、日本協会から本誌あてに寄せられました。**これは一般入場者九百五十五人分に当たります。観戦された方々に、誌上をもって心から感謝いたします。ありがとうございました。

また、流山市野々下931の**64前田美智子さん**から、本誌購読料余剰金三百円、東京都葛飾区高砂2の19の10**本島道子さん**から千円、**全日本学生連盟から二万円**が寄せられました。重ねてお礼申し上げます。

全日本総合とデンマーク戦の豪華プロさしあげます

46年度全日本総合選手権および47年1月のデンマーク対日本の女子国際大会の豪華なプログラムをさしあげます。

全日本のプロは協会広報スタッフが制作したもので、年間主要大会記録、歴代記録等はもちろん、中国問題等の興味ある読みもの、出場の主力選手の写真抄歴がついており、見るだけでも楽しいものです。

また、ユ杯の前衛戦として興味あるデンマーク×日本のプロには、金髪のヒロインたちの美しい写真や略歴、デンマークのバドミントン事情などがもりだくさん。日本選手の紹介もニックネームやエピソードを入れスターを身近かに感じさせます。

いずれも、部数に限りがありますので、品切れのさいはあしからずご承知下さい。代金は不用ですが、送料として、各々五十円分の切手をお送り下さい。

次号予告

次号は対デンマーク戦のあれこれ。外国女子の来日は、前回のユ杯以来で、久しぶりのこと。写真をはなばなしく添え、熱戦のもようや、勝敗の意味するところ、北欧女性の生活ぶりなど、多彩な角度から取り上げてみたい。

また、今年末から始まるト杯のゾーン予選に備えて、男子陣も「女子に負けるな」とばかり正月から強化合宿のスタートを切った。強化は今後、定期的に続けられるが、次号では、その第一弾をレポートする。

このほか、講座、ニュースなど例月どおり盛りだくさん。

編集室

○…微力な小誌だが、みなさんのご支援で、なんとか息をつきながら、あしかけ四年目にはいった。月日のたつのは、まったく早いものだ。毎年、いや毎月、今度は今度は、といろいろ企画を考えて張り切るのだが、意あって力たらず、なんとも省みてはずかしい。

○…さて本号はユ杯に関する特集。時期的には少々、早めの感もあるが、各位の関心を高め少しでも、愛好者以外の人々に知ってもらおうと編集してみた。後半に収録した「ユ杯の回顧と反省」は、当事者ならではの実感あふれる内容。これだけ読めば、ユ杯のすべてについては〝通〟になれると思う。合わせて、選手の体力測定データ、みなさんとくらべて下さい。

○…やがて、札幌五輪。その直前にデンマークがやってくる。ここで日本が勝てば、まず一段階は自信がつく。オリンピックムードに負けず、盛大に行なえるよう期待したい。

【バドミントン界】第29号
昭和46年12月25日　印刷
昭和47年1月1日　発行
編集兼発行人　川端昇市
発行所　東京都渋谷区神南一の一の一
岸記念体育館内
日本バドミントン協会
電話　四六八・三一一一（内線二五一
四六七・七〇九五（直通）
郵便番号・一五〇
振替口座・東京三二一九三
印刷所　東京都豊島区南大塚二一二九
明宏印刷株式会社
定価　一部　百三十円

★46年度全日本総合選手権大会

（十二月七―十二日・代々木第二体育館他）＝本文記載分除く

■男子シングルス

▽一回戦

森田（栃木県盲学校教員） 2 1515―00 0 遠藤（スワローク化研）
水川（新日鉄広畑） 2 1515―73 0 西川（正強高）
宮川（カワサキラケット） 2 1515―49 0 田所（法大）
小島（ヨネヤマラケット） 2 1515―93 0 森田（栃木県盲学校教員）
今井（早大） 2 1515―66 0 下田（富山商高）
草島（法大） 2 151515―91218 1 窪田（甲府市教員）
鷲尾（中大） 2 1518―1315 0 工藤（熊本中央教）
木戸（日体大） 2 1515―00 0 岩下（岩美宝店）
池田（電東京） 2 151215―101515 1 杉田（横浜立野高教員）
遠藤（日大） 2 1515―22 0 山口（電近畿）
本間（トヨタ自工） 2 1515―48 0 長谷川（藤花高教）
栂野尾（ヨネヤマラケット） 2 1715―140 0 水川（新日鉄広畑）

▽二回戦

関（早大） 2 15915―8158 1 門間（日体大）
谷口（立大） 2 1515―910 0 清水（永見高）
今泉（高岡市役所） 2 1515―312 0 植田（近畿大）
坂本（カローラ神奈川） 2 1517―1115 0 藤上（祇小教員）
森（川島紡績） 2 1515―84 0 小野（電近畿）
鈴木（電東京） 2 1515―47 0 二上（早大）
秋山（秋山紙店） 2 1515―83 0 宮川（カワサキラケット）

▽三回戦

小島 2 1515―58 0 今井
鷲尾 2 151515―81217 1 草島
池田 2 1581515―91513 1 木戸
本間 2 1515―28 0 遠藤
栂野尾 2 15915―15915 1 関
今泉 2 1515―1310 0 谷口
森 2 1517―1214 0 坂上
鈴木 2 1518―1717 0 秋山

▽準々決勝

小島 2 15―4（キケン） 0 鷲尾

■男子ダブルス

▽一回戦

本間 2 1515―08 0 池田
栂野尾 2 1515―6615 1 今泉
鈴木 2 1515―82 0 森
鷲尾・尾崎（中大） 2 151515―121813 1 北方・長谷川（藤花高教）
山本・佐藤（北辰電機） 2 171315―141518 1 植田・岩田（近畿大）
笠井・大和田（青学大） 2 151510―52115 1 武岡・佐倉（パンアメ航空日立電子）
今泉・河村（高岡市役所） 2 1515―43 0 森田・井坂（栃木別盲学校教）
秋山・窪田（秋山紙店、甲府市委） 2 1517―1016 0 落合・平井（カワサキラケット）
鈴木・池田（電東京） 2 1515―00 0 藤原・藤上（祇小教員）
牧野・遠藤（日大） 2 1515―129 0 工藤・芦原（中央女高教、西合志小教）
小島・栂野尾（ヨネヤマラケット） 2 1515―18 0 相川・小泉（中大）

▽二回戦

門間・木戸（日体大） 2 151115―91512 1 鷲尾・尾崎（中大）
本間・松島（トヨタ自工） 2 1515―123 0 山本・佐藤（北辰電機）
今泉・河村（高岡市役所） 2 1515―8615 1 笠井・大和田（青学大）
秋山・窪田（秋山紙店、甲府市委） （キケン） 森谷・星野（電東京）
鈴木・池田（電東京） 2 1515―1112 0 今井・二上（早大）
小島・栂野尾（ヨネヤマラケット） 2 151514―11817 1 牧野・遠藤（日大）
堺・関（カワサキラケット、早大教員） 2 151511―3615 1 伊村・樋口（名鉄）
草島・田所（法大） 2 1581515―131504 1 森・河田（川島紡績、多治見教委）
堺・関（カワサキラケット、早大教員） 2 151512―4915 1 浅見・銭谷（中大）
伊村・樋口（名鉄） 2 1515―22 0 西川・佐野（正強高）
森・河田（川島紡績、多治見教委） （キケン） 佐々木・木邦代（岩谷堂高教、千厩高教）

◇女子シングルス

▽一回戦

古谷（一条高） 2 1111―52 0 木村（昭和学院職員）
小片（日体大） 2 12711―10113 1 柿本（三菱重工長船）
谷沢（日女体大） 2（キケン） 池田（三菱電機伊丹）
橋本（トヨタ自工） 2 11119―8712 1 秋本（四条畷高）
陣内（日体大） 2 1111―26 0 千葉（北辰電機）
大場（東大阪短大） 2 1111―85 0 池田（トヨタ自工）
池田（日女体大） 2（キケン） 0 西尾（四条畷高）
天野（東海女短大教員） 2 11812―21110 1 池尻（茂原高教員）
佐伯（一条高） 2 1111―75 0 徳水（丸尾中教員）

▽準々決勝

木門戸間 2 151510―2715 1 本間島
今河泉村 2 1515―613 0 秋山
鈴木田 2 151512―9615 1 小野島尾
草田所島 2 1515―74 0 堺関

▽二回戦

湯木（カワサキラケット）2 — 1111 — 11 — 1 古谷（一条高）0

小片（日体大）2 — 1111 — 44 — 0 谷沢（日女体大）

高崎（東大阪短）2 — 1111 — 62 — 0 橋本（トヨタ自工）

相沢（ヨネヤマラケット）2 — 1111 — 56 — 0 陣内（日体大）

中山（弘文堂）2 — 1111 — 01 — 0 大場（東大阪短）

堀川（日体大）2 — 1112 — 310 — 0 池田（日女体大）

柴山（東大阪短）2 — 1111 — 12 — 0 天野（東海短大教員）

高坂（青学大）2 — 1111 — 63 — 0 佐伯（一条高）

▽準々決勝

湯木 2 — 111110 — 212 — 1 小片

高崎 2 — 119 — 1117 — 1 相沢

中山 2 — 1111 — 14 — 0 堀川

柴山 2 — 1111 — 28 — 0 高坂

◆女子ダブルス

▽一回戦

木村・池尻（昭和学院職、茂原高）2 — 15 18 8 — 17 15 — 1 木村・君山（東女体大）

栗原・名和（東女体大）2（キケン）0 池田・松尾（三菱電機伊丹）

工藤・紺野（豊田織機）2 — 1515 — 67 — 0 光中・宮本（金子小教、小松原女高教）

土井・奈良岡（電東京）2 — 1515 — 105 — 0 古谷・佐伯（一条高）

柿崎・野島（東女体大）2 — 1515 — 6 9 15 — 12 9 15 — 1 長町・原（三菱電機伊丹）

相沢・竹中（ヨネヤマラケット）2 — 1515 — 44 — 0 木村・池尻（昭和学院職、茂原高）

▽二回戦

堀川・陣内（日体大）2 — 1515 — 14 — 0 栗原・名和（東女体大）

杉田・味蓼（日本コロムビア）（キケン）0 西尾・秋本（四条畷学）

池田・塩崎（日女体大）2 — 1515 — 65 — 0 工藤・紺野（豊田織機）

高坂・漆畑（青学）2 — 1515 — 411 — 0 土井・奈良岡（電東京）

中山・湯木（弘文堂、カワサキラケット）2 — 1515 — 10 — 0 落合・茂木（柳島小教員）

小片・横尾（日体大）2 — 1515 — 134 — 0 徳永・柿本（丸尾中教、三菱工長船）

◆混合ダブルス

▽準々決勝

相竹 2（キケン）0 柴山・高崎（東大阪短大）

池塩田 2 — 1715 — 1411 — 0 堀内川

中湯木 2 — 1715 — 147 — 0 高坂畑

高柴崎山 2 — 1515 — 35 — 0 小片尾

▽一回戦

渡辺・森田（横浜市役所）2（キケン）0 森谷・藤井（電電東京）

落合・湯木（カワサキラケット）2 — 1515 — 27 — 0 佐藤・田中（北辰電機）

星野・土井（電電）2 — 1515 — 99 — 0 久保田・宮本（小松原女高教員）

関・功力（早大職員、育成幼稚園）2 — 1515 — 510 — 0 平井・鈴木（カワサキラケット）

鈴木・奈良岡（電東京）2 — 1511 — 15 — 1 浅井・田村（石川播磨重工）

▽準々決勝

堺・天野（カワサキラケット、東海短大教）2 — 1515 — 32 — 0 渡辺・森田（横浜市役所）

★全日本学生選手権＝本文収録を除く

◇男子団体戦

▽一回戦

明大3—0龍谷大、福岡大キケン東大、近畿大3—0札幌商大・山形大キケン大東文化大、東北大3—2明学大、関大3—0北星学大、東北学大3—0岡山大・慶大3—1北海学大

▽二回戦

中大3—0明大、青学大3—0福岡大、近大3—1立大、早大3—0山形大、法大3—0東北大、関大3—2日体大、東北学大3—2関東学大、日大3—2慶大

▽準々決勝

中大3—0青学大、早大3—1近大、法大3—1関大、日大3—1東北学大

星野・土井（電電東京）2 — 15 8 — 9 17 — 1516 — 1 木（カワサキラケット）落合・湯

杉田博・杉田良（横浜立、日本コロムビア）2 — 1515 — 612 — 0 育成幼稚園 関・功力教

鈴木・奈良岡（電東京）（キケン）蓼（北辰電機）山本・味

▽準決勝

早大 3—0 中大

今井上 2 — 1517 — 44 — 0 鷲尾 二本及川 2 — 1515 — 115 — 0 小泉相川 二上 2 — 1515 — 119 — 0 鷲尾 法大 3—2 日大

草田島 2 — 1515 — 114 — 0 飯井野涌 笠浜井谷 0 — 1110 — 1515 — 2 遠藤野牧 草島 2 — 1515 — 37 — 0 涌井 笠井 0 — 25 — 1515 — 2 遠藤 田所 2 — 1515 — 63 — 0 牧野

▽三位決定戦

日大 3—2 中大

牧野 2 — 1517 — 914 — 0 鷲尾遠藤 飯井野 0 — 1313 — 1515 — 2 小泉相川 牧野 2 — 1515 — 114 — 0 尾崎舟山 遠藤 2 — 1515 — 1111 — 0 相川 舟山 0 — 1310 — 1815 — 2 鷲尾

◇女子団体戦

▽一回戦

昭女大3—2札静短大、東女体大3—0北星学大、青学大3—1親和女大、武庫女大3—1北海道女短大、宮城学女大3—1

大阪樟蔭女大

▽準々決勝

東大阪短大3－0昭女大、東京女体大3－2青学大、日女体大3－0武庫女大、日体大3－0宮城学女大

▽準決勝

東大阪短大3－1東女体大

高柴山2（1515－1060）栗原名和
石大場崎1（8121515－1514）柿島崎2
柴山2（1111－430）名和
高崎2（1111－130）栗原
池塩田崎2（1515－750）堀内陣
遠谷藤沢2（1515－1090）小片尾横
池田2（1111－730）堀川

日女体大3－0日体大

▽三位決定戦

日体大3－2東女体大

小横片尾0（5111－1515）2栗原和名
堀川内陣2（1715－1450）柿島崎野
小片2（1111－630）0名和
陣内0（671－1111）2栗原
堀川2（1111－740）0柿島崎

◇男子ダブルス

▽三回戦

草島田所2（1515－240）加地藤
相川泉2（1541－15710151）1笠和井大
涌井・飯野2－0浜谷・斉藤（日大・法大）
鷲尾・尾崎2－0田口・小玉（中大・青学大）
及川・本間2－0関本・武藤（早大・日体大）
植田・岩田2－0桐生・志子田（近大・日体大）
渡辺・菅2－0西本・梅本（東北学大・福岡大）
宮崎・上野2－0安斉・岩淵（慶大・東北学大）
浅見・銭谷2－0庄子・早坂（中大・東北工大）
今井・二上2－0丸山・山田（早大・中大）
足立・菅原2－1菅沼・在原（近大・明大）
牧野・遠藤2－0北村・佐藤（日大・日体大）
岡田・巽2－1堂下・南雲（法大・青学大）
笠井・大和田2－0遠藤・出間（青学大・北海学大）
加藤・曳地2－1岡本・城所（東北学大・関東学大）
相川・小泉2－0舟山・九原（中大・日大）
草島田所2（1515－240）加地藤
▽四回戦
門間・木戸2－1栗栖・日下（日体大・中大）

◇男子シングルス

▽四回戦

遠藤日大2－0浜谷法大
尾崎中大2－0斉藤山形大
相川中大2－1笠井青山学大
草島法大2－0小林関大
二上早大2－1丸山中大
岡田法大2－0宮崎慶大
岩田近大2－0山下関大

牧野遠藤2（1515－550）岡巽
今井上2（1715－1420）0足立菅原
浅見銭谷2（1515－660）0渡辺菅
植田岩田2（1515－6710）15）1上宮野崎
鷲尾崎2（1712156）1415）1及川本間
門間木戸2（1515－890）0涌飯井野
草島田所2（1515－310）0小相川泉

▽準々決勝

遠藤日大2－0浜谷法大
尾崎中大2－0斉藤山形大
相川中大2－1笠井青山学大
草島法大2－0小林関大
二上早大2－1丸山中大
岡田法大2－0宮崎慶大
岩田近大2－0山下関大

木戸2－0銭谷（日大・中大）
谷口2－0曳地（立大・東北学大）
及川2－0柳川（早大・東北学大）
笠井2－1中島（法大・関大）
門間2－0大和田（日体大・青山学大）
植田2－1岩淵（近大・東北学大）
田所2－0牧野（法大・日大）
鷲尾2－1阪本（中大・関大）
今井2－0巽（早大・法大）
遠藤2（1515－490）尾崎
草島2（1515－1100）相川
二上2（1515－8615）1岡田
谷口2（1515－4571）1及川
木戸2（1518－1140）0岩田
門間2（1515－1012）0笠井
田所2（1517－1817）1植田
鷲尾2（1517－1485）1今井

▽五回戦

◇女子ダブルス

▽二回戦

柴山・高崎2－0甲州・高林（東大阪短大・日女体大）
山崎・宮武2－1鈴木美・堀江（青学大・宮城学大）
中村・秋山2－0坂崎・大井（日体大・札静修大）
木村・君山キケン谷沢・岩本（東女体大・日女体大）
栗原・名和2－0田中・遠藤（東女体大・日女体大）
浅野・飯田2－0武田・鈴木由（親和女大・宮城学大）
時田・鈴木キケン菊地・佐藤（日女体大・山形大）
堀川・陣内2－0藤井・森田（日体大・東女体大）
石崎・大場2－0川村・井指（東大阪大・日女体大）
柿崎・野島2－0相内・石山（東女体大・北女短大）
石田・吉田2－0伊藤・川島（日女体大・宮城学大）
小片・横尾2－0岡本・伊藤（日体大・昭女大）
塩崎・池田2－0清水・外崎（日女体大・東女体大）

遠藤2（1515－913）0草島
二上2（1715－1412）0木戸
谷口2（1581－0151517）1門間
田所2（1515－850）0鷲尾

RECORD

広沢・中田 2—0 三原・三上（日体大）（日女体大）

鈴木・樋口 2—0 村崎・水島（日女体大）（檀蔭大）

高坂・漆畑 2—0 北島・山森（青学大）（日体大）

▽三回戦

柴崎 山2(15-7 4)0 宮武 山
高畑 坂2(15 12-6 5 15)1 鈴木(真)口 樋
池田 塩崎2(15 12-6 12)0 中広 田沢
横尾 小片2(15-4 12)0 吉石 田田
野島 柿崎2(15 17-5 14)0 大石 場崎
陣内 堀川2(15-8 3)0 鈴木(範)時 田
名和 栗原2(15 12-6 3 15)1 飯浅 田野
君山 木村2(15 14-6 17 12)1 秋中 山村

▽準々決勝

柴崎 山2(15-4 5)0 君木 山村
漆畑 高坂2(15 12-6 5 15)1 樋 鈴木(真)口
池田 塩崎2(15 12-6 12)0 中広 田沢
横尾 小片2(15-4 12)0 吉石 田田
野島 柿崎2(15 17-5 14)0 大石 場崎
陣内 堀川2(15-8 3)0 鈴木(範)時 田
名和 栗原2(15 12-6 3 15)1 飯浅 田野
君山 木村2(15 14-6 17 12)1 秋中 山村

◇女子シングルス

▽四回戦

柴山(東大阪) 2(11 12-9 10)0 名和(東女体)
池田 塩崎2(15 15-6 7 15)1 漆高 畑坂
横尾 小片2(15-11 11)0 野柿 島島
陣内 堀川2(15 12-6 15 10)1 名栗 和原

▽準々決勝

柴崎 山2(15-4 5)0 君木 山村
漆畑 高坂2(15 12-6 5 15)1 樋 鈴木(真)口
池田 塩崎2(15 12-6 12)0 中広 田沢
横尾 小片2(15-4 12)0 吉石 田田
野島 柿崎2(15 17-5 14)0 大石 場崎
陣内 堀川2(15-8 3)0 鈴木(範)時 田
名和 栗原2(15 12-6 3 15)1 飯浅 田野
君山 木村2(15 14-6 17 12)1 秋中 山村

★第17回愛媛県社会人選手権大会（十一月七日・愛媛大体育館）

◇一般男子シングルス

▽準々決勝

三好(三好石油) 2(15-5 2)0 木原(新工専ク)
森田(愛大ク) 2(15-8 3)0 藤田(丸善石油)
平木(新工専ク) 2(15-12 13)0 小泉(丸善石油)
永井(丸善石油) 2(15-10 9)0 池田(丹原)

柴山 2(11-6)0 堀川
高崎 2(11 4-0 11 0)1 谷沢
高坂 2(11 11-1 11 12)1 陣内
小片 2(11-9 0)0 大場

▽準々決勝

高崎(東大阪) 2(11-6 8)0 池田(日女体)
高谷(青学日女体) 2(11-5 7)0 栗原(東女体)
高坂 2(11-2 1)0 本(東大阪)
陣内(日体) 2(11-6 8)0 石崎(東大阪)
小片(日女体) 2(11-1 6)0 姉崎(東女体)
大場(東大阪) 2(11 10-6 3)1 塩崎(日女体)
堀川(日体) 2(11-0 4)0 南場(早大)

◇一般男子ダブルス

▽決勝

三好 2(15 15-7 7 15)1 永井
永井 2(15 9-9 15 11)1 平木
三好 2(15-10 12)0 森田

◇一般女子ダブルス

▽一回戦

石田・松友(愛大ク) 2(15-10 5)0 今鳴・竹之内(今北OG)
十亀・高橋(今北OG) 2(15 17-2 15)0 嶺尾・長嶺(愛大ク、松前町)

石田 2(11 8-7 11 11)1 今嶋
今鳴(今北OG)・松友(愛大ク) 2(11 12-7 10)0
石田(愛大ク) 2(7 11 11-11 0 2)1 高橋(今北OG)
永井・三好(三好石油、丸善石油) 2(6-15 6-15 2)1 森田・新名(愛大ク)

◇一般女子シングルス

▽準決勝

▽決勝

◇一般男子ダブルス

▽決勝

▽準決勝

松友 2(15 12-4 15 2)1 十亀
石田 2(15-15 2)1 高橋

水鳥・検定合格球

ファストゴールド

ファストシルバー



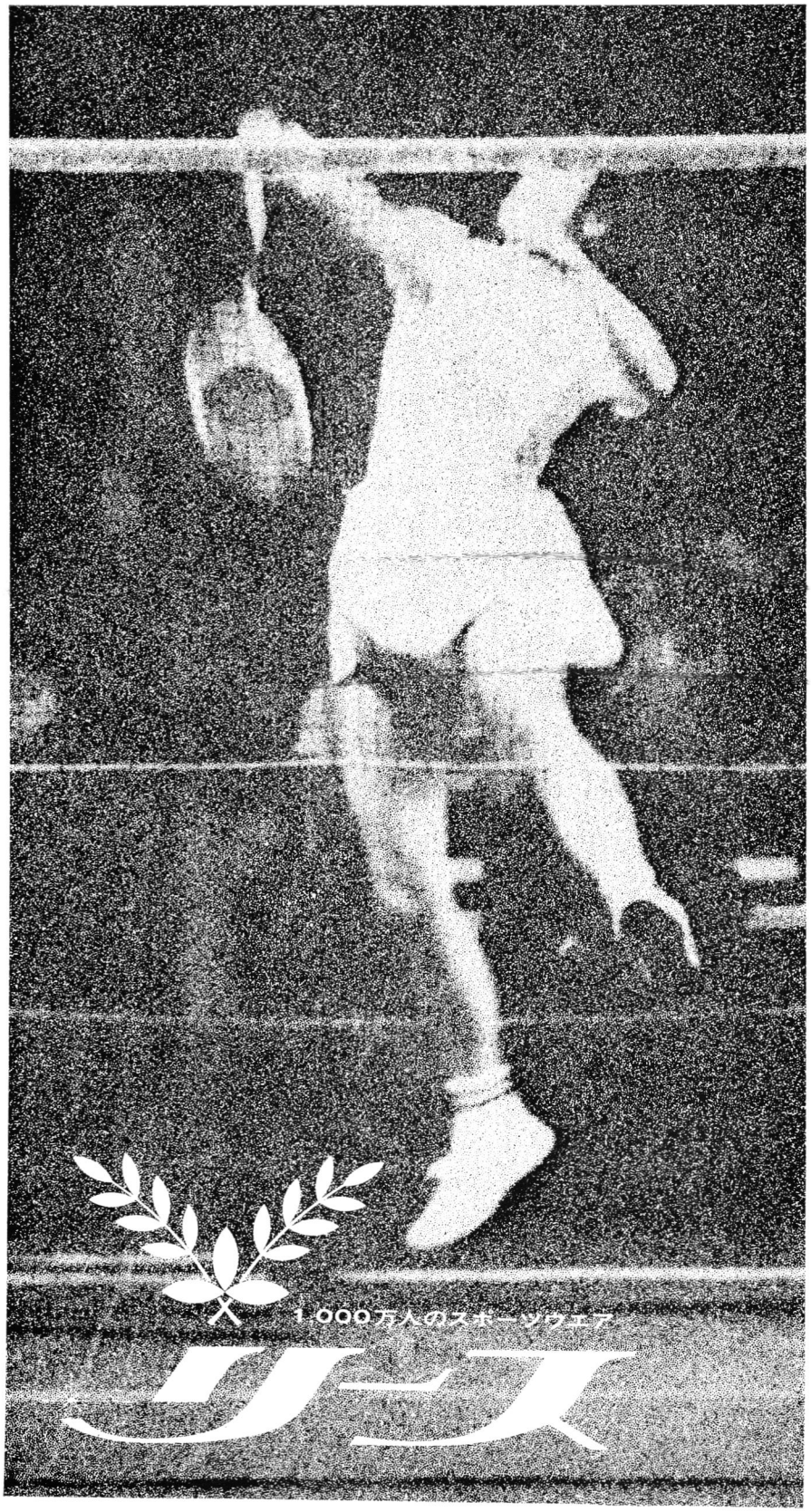


ファスト印シャトルコック製造発売元 有限会社 ジャワ商会

山形市六日町7 28

電話 02362（22）3994(代) 3280・0545

この一瞬!!



あなたはひかる――はげしい動き、ふき出す汗、すべての条件を
プレイヤー本位に満たすカワサキの〝リース〟はあなたのウエアです。

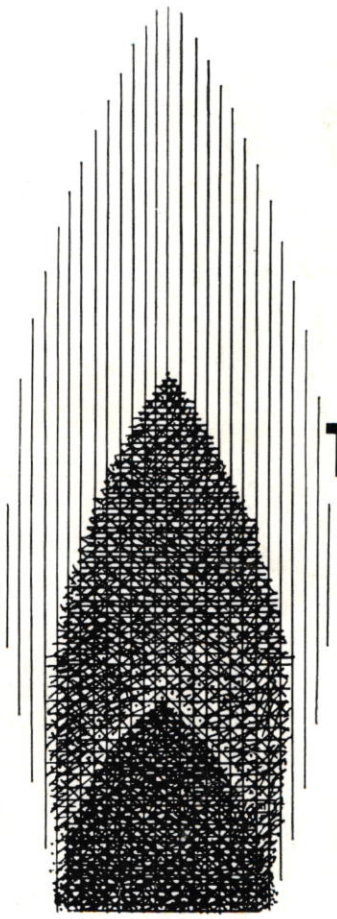
1,000万人のスポーツウエア

リース

K TOKYO

河崎ラケット工業株式会社

東京都台東区台東2-28-5 電話(831)-1884・0453



TOKYO gas

東京瓦斯株式会社

東京都中央区八重洲１の３
電話(273)0111(大代表)